

Take me to paradise.

Scenario of Manhattancafe(prototype).

Cold open.

一人きりの部屋。静かに黒をマグカップへ注ぎ入れるウマ娘がいる。ターフを未だ駆けぬ私が一人。

かの者の名はマンハッタンカフェ。罪悪神話を塵す闇色の獣也。

※

ずずり。

朝一番に飲むコーヒーは、私の目を醒ましてくれる。

夢や惰眠の幸福に引き摺られる私を、明瞭な現実へと引き戻してくれる。

だから、私は朝のコーヒーを欠かさない。

どれだけ退屈でも、現実は得難く。泡沫に消える夢の世界と違って、一つのもが永遠に続く。砂糖の全く入っていないこのコーヒーのように、ただ黒一色の苦々しいものに思えなくもないけれど。

その苦さが、今までの私を生かしている。

今日は休日だ。久方ぶりの休日。それは羽根を伸ばす時間であり、心を癒す時間であり、退屈に殺される時間でもある。

等しく黒い湖面を持ったさまざまのコーヒーがあるように、人それぞれ等しく時間自由がある。何もしなければ黒のまま、何かをすれば口を付けて、その黒における闇を垣間見れるような。

同じに見える休日という一杯。けれど、人によってその味は細かく違うのだ。

「今日は本でも読みましょうか」

おもむろに口から独り言が漏れた。その言葉に自ら従うように一つ本を手に取り、一つ文章を読む。

物語に生きる人々は、その思考回路さえ我々読者に晒している。そのことを少し可哀想に思う時もある。彼らの人生はどんなに美しくても見せ物として描かれ、彼らには休日という概念は存在しない。

常に蠢くその日常に平穩は全くなく。それはそれで、退屈そうだ。

女優という仕事をする上で、凡ゆるヒトガタを自分に映した。激情的に、冷淡に、怠惰に、真剣に。それらを憑依させることは私にとって苦ではなく、それは私自身に色がかけられないからだと思う。

鏡は光と映り込みを以ってのみそこに色を持つのだ。誰かが照らし、誰かを取り込む。そうしてやっと、私は私というつまらない存在を生かしてやれる。

即ち、普段の退屈な私は生きていないのと同義だ。物語の登場人物を見せ物の人生とは言ったが、結局のところ彼らはそれだけ魅力的な存在ということでもあって。無色透明の私は、何処にも、誰にも。

ブルルルル。

思考を徐々に現実慣らししているところで、電話が鳴った。……マネージャーからだ。

「おはようございます」

「おはようございます、マンハッタンカフェさん。……早速ですが、あの件どうですか」

なんだったか。寝ぼけた頭を辿り、思い当たる。

「……ああ、レースでしたっけ」

「そうです！しかも、ただのレースじゃないですよ！ウマ娘にとつての最高峰、ハトウインクル・シリーズVへ。いよいよもつてカフェさんは参戦するんですから！」

あの件とは他でもない。一介のウマ娘である自分が、いよいよもつてレースの世界、ウマ娘としての本懐。

ハトウインクル・シリーズVに身を投じるべきだという話。それは単なる人気取りの一環なのか、私の存在を何か変えるものなのか。マネージャーにとつては戦略の一部なのだろうが、その一杯を私がどう味わうかは自由だ。

今までの私の人生は物語になれない。私は退屈に殺されそうなほど味のしない毎日を送っているから。

けれど物語とは、何もその存在の生まれから始まるものとは限らない。

ここから、先に。どこかに、往けるだろうか。私一人ではやはり無理な気がした。けれど私は孤高を気取り、誰にも彼にもつまらなさそうな態度を取る。

本当につまらないのは、私自身以外あり得ないのに。

「カフェさん聞いてます〜?」

おっと。マネージャーの呆れ顔が目につかぶ。

「……ああ、すみません」

「もう一回言いますね。…今度、トレセン学園に行つてきてもらうことにしましたから。入学届とかそーい
うのです。寮生活、学園生活!……どうですか?」

「したことがないので、わかりませんね」

トレセン学園。正式名称、日本ウマ娘トレーナーセンター学園。超人的走力を持つウマ娘達だけが集い、
全寮制での生活の学園。確かにトゥインクル・シリーズに挑戦するならこれ以上の地はないだろう。

マネージャーはこの企画に相当な気合を入れているらしい。

それにしても。

「集団生活、か」

切れた電話に向けて喋りかける。物語に於けるそれは人同士の群像劇ではなく、大抵主人公の周りに息遣いを感じさせるための道具である。どんなに生きていような演技をしても、その名前はA、とかB、とか。そういった記号以上にはならない。

けれど現実はずう。

良い言い方をすれば全員が主人公で、悪い言い方をすれば全員等しく価値がない。そこに差はなく、思い通りに生きている。そしてそれは基本的に波紋を作らない。影響され合う立場にいながら、結局他人の力で動くほどのものにはならない。

それでもなんとなく、飢える感覚はある。今の生活を退屈と断じ、それ以上を求める感覚はある。それは傲慢か、懇願か。どちらにせよ私に変化を求めていることには変わりはない。存外私はこのレースというものに乗り気なのかもしれない。

……少しだけ。少女のような夢を見る。どこかに劇的な出会いがあって、全ての私が色づくような。そんな、形すらない夢を見る。

顔も身体も見えない君は、確かに私に手を伸ばし。私はその手を取って、強く強く握る。絶対に離さない。血が溢れて私の掌を染めるまで、力を込め続ける。

そして私は、嘔うように呟いた。
ねえ、早く連れて行って。

これが私の物語の始まり。正確には、私と君の始まり。終わらない言葉は何度も繰り返し、それでいて終わりへ突き進む。終わらない物語も楽しいが、終わるからこそ物語は美しいのだから。

※

刻一刻。紡がれよ。私と君の愛が為。
楽園への道筋は、ここより。

Take **me** to paradise.

Scene 01:Take me.

「ねえ、早く連れて行って」

マンハッタンカフェと初めて会った時、何処へでもなく彼女が呟いたのを覚えている。祈るように、待ち構えるように。

飢えた獣が懇願するのは、その渴きを満たすことのみ。

※

マンハッタンカフェというウマ娘がいる。女優としても活躍していた彼女のことは、俺がトレーナーを志す前から知っていた。でも、だからこそ関係ないと思っていた。トレーナーとはウマ娘の「走り」を一心同体でサポートするものであり、逆説的に言えばマンハッタンカフェにはトレーナーは必要ないはずだ。

女優業という華々しく忙しい舞台がほかにあるのだから、彼女は走らなくても満たされている。そう、思っていた。そもそも自分にとつては関係のない世界の人物で、決して交わらない平民と貴族のような。

だから、彼女がトレーナーを探しているという噂が立った時は驚いた。トレーナーを探し、契約する。それはマンハッタンカフェがその足でターフを踏みしめることを決めたからこそその行動だ。もちろん半信半疑だった。その話を聞いて最初に抱いた感情は嫌悪だったかもしれない。持てる者が二兎を追うことへの嫌悪。

その噂を実証するかのようにマンハッタンカフェは度々選抜レース場に出没し、一度も走らずに帰っていった。トレーナーが新たな担当ウマ娘を見つける場である選抜レースに姿を現したのだから、もう疑いようがないだろう。とはいえこれも伝え聞いた話だ。実際は大勢のトレーナー候補が押し掛けるので、俺のような新人には姿を見ることがすら叶わなかったのだ。

だから、目を疑った。

学園からの帰り道、闇に紛れるように歩く彼女を俺は見た。帽子を深く被り、ロングコートでシルエットを隠したマンハッタンカフェは、いつもテレビで見えるような姿ではなかったけれど。

安っぽい言葉で言えば、オーラがあった。確かに彼女はそこにいた。闇に紛れるようにか細く、けれど夜に光るようにしっかりと。

分かってしまった。彼女に今、声をかけねばならないと。理屈でこねた嫌悪は消し飛んでいた。端的に言えば、そこにある何かに魅せられた。マンハッタンカフェという存在そのものにか、あるいは既に結びついた運命に。そしてまるで本能が叫ぶように、俺はマンハッタンカフェに話しかけた。

Scene 01: Take me.

「なあ、きみ……」

きつと届かない。常識的に考えれば、身を隠している有名人がこんな唐突な声掛けに引つかかる訳がない。でも。その時。その時に、彼女は一言。静かに叫んだ。

「ねえ、早く連れて行って」

そう、確かに薄い唇に言葉を浮かべた。世界へ訴えるように。

なにもわからなかった。何処へ連れていくのか。そもそも俺に向けた言葉なのか。こちらに気付いていたかさえもわからなかったのに、俺は焦るように言葉を繋げる。彼女の黄金色の瞳は、じつとこちらを見据えていた。

「わかった。俺が君を連れていく」

手を離れたら、何処かへ消えてしまいうような気がしたから。それだけの理屈で、彼女の問いかけを掬い上げる。

返答はなく、彼女はくるりと踵を返す。こちらに近づいてくる。言葉はなく、横を通り過ぎていくのを黙って待ってしまう。……いいやダメだ！

「あの、明日またここで」

そう言った時、わずかに彼女の脚が止まった気がした。

…運命の車輪が、重々しくも動き出した気がした。

私は物語が好きだ。皆私にない輝かしい人生を語るからだ。幼い頃の私はどうしても彼らのようになりたくて、女優を志した。演じるのではなく、彼女たちに私がなる。私は鏡であり、薄い台本の上にあるヒトガタを舞台へ映し出すのだ。

その役割の中で、わずかに私は退屈さを忘れられる。たとえば情熱的な恋を間近で見れば全ての景色が色づくように錯覚する。たとえば憎悪に身を焦がす殺人鬼を模せば流れる血がとても綺麗に見える。

人生は退屈すぎて、それぐらい一生懸命に何かに打ち込まないと楽しめないのだと思う。きつと、彼も。彼女も。何かにその身を捧げているから幸せに生きている。

私には、それが無い。だから私はつまらない。本能から満たされない。

とはいえ自殺を考えたことはない。いくら生きるのがつまらないといっても、死はもつとつまらないからだ。それは永遠に続くのだから。代わり映えもなく、孤独の中で全てを後悔し続ける空間になる。そんな退屈は求めたくない。

だから私は生を求める。生き続ける先に、答えがあると信じて。

※

Scene 01: Take me.

私にレースの話が舞い込んできたのは、マネージャーの指図だった。あのマンハッタンカフェがハトウインクル・シリーズVにデビューすれば大きな話題になると。

馬鹿馬鹿しいと思ったのは否定しない。私は単に話題になるために女優をやっているわけじゃない。けれど少しの期待を求めて動いてしまうのは、飢えた獣の性なのだろう。

トレセン学園備え付けのコース。そこで選抜レースを見届けて、彼女たちの見る景色に想いを馳せる。風を切るのとはそんなに楽しいだろうか。脚を早く回すのはそんなに興奮するだろうか。わからない。演じるように、自分に彼女たちを映し出す。何かもどかしい感覚があったけれど、それ以上には届かなかった。

いつものように変装して、私は学園を出る。とはいえオフの私を目ざとく見つける人などそういない。私に映された物語には色が付いているけれど、私自身は真っ黒な黒子に等しいのだ。演技がない私には、つまらない人生を送る一人のウマ娘という記号しか残されていない。

ああ、いつそ。どこか狂ってしまえるのなら。たとえば、何か罪を犯す殺人鬼の気持ちがわかればな。突拍子もない思考に従い、一人その心をシミュレートしてみる。

たとえば私は世界の全てが憎たらしい。誰でもいいから人の命を台無しにしてみたい。だって羨ましいから。手が届かないから。そうして殺人を達成した後、私は一躍時の人になる。今度は誰もが理解できない、埒外の人間に躍り出る。誰からも相手にされない無欲の人は、誰からも憎まれる全ての敵になる。

うん、悪くない。そうして最後、断頭台へ連行されることが決まった時。私はうっとりとして呟くのだ。

「ねえ、早く連れて行って」

そこまで思考を卷いた時、誰かの声が聞こえた。私の心は軽く浮いていて、最初は私に声をかけているなどとは思わなかった。けれど。

「俺が君を連れていく」

続けて発せられた台詞が、私をとらえた。こちらの台詞に反応したのだろうか。独り言に対して会話しようとは殊勝な人だと思った。そうして、ゆっくりと声のする方を見る。

……思えばその時にはもう。私の命は、始まりを告げていたのかもしれない。

言葉はなかった。聞き間違いだったかもしれない。私を断頭台へ連れていってくれる人などいない。そこはある種のゴールで、物語が幕を閉じる場所だけだ。私にはゴールがない。そういうことなのだろう。

その男の人はどこかで会ったのだろうか。もし知り合いだったなら、礼儀作法は通さなければ。芸能界の付き合いに興味はないけれど、無理に嫌われる筋合いもない。そう、ゆっくりと近づいて。通り過ぎようとした時に、彼の言葉がナイフのように突き刺さった。

「あの、明日またここで」

その時。明確に。心臓が止まるような感覚があった。血が流れ出すような幻覚があった。脚を進められなくなる錯覚があった。私は確かに殺された。そんなふうに思った。けれどそれは一瞬。すぐにつまらない人生が戻ってくる。だけだ。

色鮮やかな血染めの世界を、その一瞬私は垣間見た。

そんなふうには昨夜のことを思い出しながら、今日の予定を確認する。……夜は、空いている。なら。もう一度行ってみようか。そうして、もう一度。今度はしっかりと乞うてみようか。

ねえ、早く連れて行って。

楽園への道筋は、未だ方角すら見えず。

※

対峙する。何度も相見える。決闘のように、逢引きのように。夜にただ二人、人気のない道先で会うのが私たちの日課になっていた。姿を見せて、立ち止まって。君がまた明日と言う。それだけの関係。その先には至らない。永遠に至れないとしたら、それはまた退屈なはずなのに。私は今日もここに来ている。

ねえ、早く連れて行って。

「あっ」

彼は私を目ざとく見つける。変装している私に気づく人間など一握りだ。女優のペールを外せば、私という存在は虚空に等しい。それなのに。

「こんばんは、カフェ」

「……こんばんは。毎日飽きませんね」

こうして僅かな会話を交わすようになるまで、それなりの日かけた。本当によく飽きないものだ。私というつまらない存在に、君は何を見ているのだろう。

「……なあ、」

いつものように、彼が口を開く。

「……では、さようなら」

そして、私は応酬せず打ち切る。それで終わり。いつものことだ。わざわざこの会話をするために、彼は何分待っていたのだろう。

「また明日」

明日の出会いが約束される。

「……はい」

そうして私はそれを確かに了承する。いつまで、何度まで。私はここへ向かうのだろう。

※

「明日も夜は空けておいて下さい。では」

マナージャーに何度目かの連絡をしてベッドに入る。灯りのない暗い闇の中に私はいて、それは本当に退屈な世界だ。私は誰も顧みないし、誰からも顧みられない。たとえば主役となる登場人物には、何かしらの深い人間関係が欠かせない。私にはそれが無い。どれもがきつと薄っぺらくて、女優の仕事は私を物語を語るための道具として使うのみだ。

飢えるような感覚。明日が待ち遠しいと、自然に思ってしまう。ねえ、早く。時間が早く進んで欲しいと乞い願う。時間の流れは永遠ではなく、どこかにゴールがあるのだと。そんな、あり得ないモノを幻視する。……まずは眠ろう。眠れば、明日は来るのだから。

※

「ねえ、カフェさん。今夜お茶しませんか」

「先約があるので。失礼します」

次の日、ルーティンと化した仕事を終える。社交辞令を切り払い、またいつもの場所へ一人で向かう。足早に、振り向くこともなく。君を迎えに私は征く。こつ、こつ。己の靴音だけが耳の中に残る。他は全て雑音で、あの空間での会話だけが価値を持つ。ねえ、早く。

なのに。

なのに。

「…おや」

その日、いくら待っても。君は来なかった。

※

マンハッタンカフェというウマ娘がいる。女優としても名高く、けれどプライベート等について多くを語らない。彼女がよくインタビュで言う言葉がある。私はただの鏡だと。物語を映しとる鏡。

それ以外に価値はないと言わんばかりの口ぶりが、ひどく印象に残っていた。
そして俺は、そのマンハッタンカフェと毎晩のように会っている。

「なあ、」

俺の担当ウマ娘にならないか。その一言が、続きが言えない。彼女はやはり俺にとっては高嶺の花で、どうしても合わないと思ってしまうからか。単に俺に勇気がないのかもしれない。けれど彼女に会い続けているのは、最初の会話があるから。彼女は確かに走りたいと、そう願ったと信じるから。

ねえ、早く連れて行って。

彼女は確か、そう独り言のように言っていた。祈るようなその言葉は、彼女に妙に噛み合っていた。もちろんマンハッタンカフェからすればただの演技の練習だったかもしれない。その真意はわからない。

Scene 01:Take me.

「けど、真意というのは得てして本人の預かり知らぬところにあるものだ。自分自身にもわからない本当の気持ちだが、どこかで顔を出すかもしれない。なんとなく彼女から目を離せず、そんなことを思っていた。だから俺は彼女に会う。毎日。絶対に。」

なのに。

なのに。

「……」

その日、俺は熱を出し。望まずして彼女との約束を破った。

※

「昨日は連絡遅かったですね、どこに行っていたんですか？」

「……いえ、別に」

「今日も夜、予定は入れてないですよ」

「……ありがとうございます」

「そろそろトレーナーさんが見つかるといいですけどね！」

マナージャーは私がトレーナー探しのために毎晩出歩いているのだと思っ
ているらしい。とんだ勘違いだ、と一瞬思ったが。もしかしたら毎晩会う彼はトレーナーかもしれないのか。考えもしなかつた可能性に思
当たる。根拠はない、けれど。あの時の言葉。彼は、私の言葉に対してこう返した。

俺が君を連れていく。

ともすればスカウトのようにも聞こえる言葉だ。そういう意図でなかつたとしても、トレセン学園の近く
にいたのだからトレーナーである可能性はある。

……自分は彼のことを何も知らない。そう、知る。同じように、彼も私のことを何も知らない。それなのに、
毎日のように会っていた。まるで、糸に結び付けられるように。

……昨日で、その連続記録は途切れたのだが。今日も私は行くのだろうか。今までは毎日約束をしていた。
それが無いのだから、会う理由もないのではないか。そうして永遠に、再び会うことはない。それでいいは
ずだ。

ぼつり。雨が降ってきて、ますます会える可能性は低くなる。君はまだ来ていない。まだ、来ていない。
永遠ではないと信じる。だって、そうでなければ。退屈すぎるのだから。

傘を持っていなかったたので、いつのまにかコートがずぶ濡れになっていた。これでは風邪をひいてしま
うかも。それでも、待つ。待つことは渴くが如し。されど、渴くは求めるが故に。どうしても得られなかつた
ものを、私はようやく得られるのだ。

「……はあ、はあ」

その時、聞こえた。君が、毎日聞いていた君の声が。

いくら待ったかは忘れてしまった。その姿を見てからの時間の方が、圧倒的に長く感じられたから。

自分でも自分の行動が理解できなかった。声のする方へ、獰猛な猟犬のように飛びかかったことが。抱き締めて、離さないことが。

「……ちよつ、カフェ……!!」

「……ああ、よかった」

でも、ひとつわかるのは。また会えた。それだけのことが、ひどく幸せ。

※

なんとなく、予感がした。俺と彼女は住む世界が違ふと思っていたけれど。この予想が当たっていたら、案外俺たちは同じ思考を持っているのかもしれない。

だから、もしまた会えるなら。今度はしっかりと、伝えよう。きっと、また会えるから。

※

「……なあ、カフェ」

「……はい」

「……俺が、君を連れて行くよ」

「……はい」

「……俺の担当ウマ娘になってくれないか」

「……はい」

その返答はとても不器用で。スターダムにいる少女とは思えなかった。声の代わりに、身体を締め付ける力が強く強くなる。……柔らかいものが上半身に当たって、こそばゆい。でも離れてくれとは言えなかった。今度こそ、離してはいけない気がしたから。

「……それでは、マネージャーに連絡いたしますので。今日からよろしくお願いします……トレーナーさん?」

力を一気に抜いて解放した後、事もなげに彼女は言う。返答は一つだ。

「よろしく、マンハッタンカフェ」

契約は成立した。楽園への道筋は、遂に方角を定める。黒い光条が今、飛び立つ。

※

今日からマンハッタンカフェとのトゥインクル・シリーズが始まる。未だに実感はあまり湧かない。彼女は女優として活躍する、既にスターの座にいるウマ娘であって。そんな彼女が何故レースという別の世界に出ることを決めたのか、俺を選んだのか。いやいや。俺は決めたんだ。

早く連れて行って。

そう言った彼女に、俺が君を連れて行く、と。そう答えたこと。応えねばならないこと。その言葉が、俺たちを繋いでいる。

……しかし遅いな。何かあったのだろうか。…電話するのは気まずい。やはり有名人だし…。そうくだらない躊躇をしている間にも時間は過ぎる。ええいままよ！決心して聞いていた電話番号にかける。通話中だったらどうしようか。いや忙しいしその可能性が高いんじゃないか。そう悩んでいると電話が繋がる。

「はい、トレーナーさん。遅くなつて申し訳ありません。今向かっているところですので、もうしばらくお待ちを」

……一方的にそう告げられ、電話は途切れた。そう言われたら実際返す言葉もないのだが。『着替えるのに少し手間取りました。さあ、トレーニングを始めましょうか』

少し後。そう言って現れたマンハッタンカフェは、真黒のコートと星柄のネクタイに身を包んでいて。

これは、勝負服じゃないか。意図がわからず、返答に困る。

「……あー、カフェ？今日は体操服でいいぞ…目立つたら」

「目立つのには慣れていますが。トレーナーさんがそちらがいいと言うなら、そうするしかありませんね」
少し寂しそうに言って、彼女は更衣室へ向かう。…言い回しが無かすれている気がする。

「……今度こそ。始めましょうか」

今度の彼女は支給の体操服を着て出てきた。艶やかな黒髪は、体操服姿でも目立つ。少し見惚れてしまい、慌ててその考えを拭い去る。俺はトレーナーで、担当ウマ娘に変な気を起こすなんてご法度だ！首をぶんぶんと振っていると、彼女はゆっくりと口を開く。

「……どうですか、トレーナーさん」

「どう、って……？」

少し、白い頬が赤らんで。

「……似合って、いますか？」

似合う。そういうことはカフェの方が詳しい気がする。俺はファッションなんてよくわからないし、そもそも体操服にファッションの何があるのかもわからない。

「……やはり、勝負服に」

ひよっとして、そういうことか……？

「あー！いいんだよカフェ、似合ってる。今日はこれが正装だからな」

「……はい」

心なしかうれしそうだ。…なんだかわからないが、服が似合っているかが気になっていたらしい。やはり女優というのはプライベートでも服装に気をつけるものなのだ、と感心する。

「さて、まずは芝を一周だ！」

「……はい。早く、レースに出たいですね」

早く。その言葉にどきりとする。ねえ、早く連れて行って。その約束は、まだ。

「……そうだな。早く、だな」

けれど俺は契約したのだ。この漆黒のウマ娘を、まだ見ぬ先へ連れて行くと決めたのだ。だから。その手を取る義務がある。

走り出すマンハッタンカフェを見て、思う。彼女もやはり、一人のウマ娘なのだ。だから、勝たせてやりたい。センターに立たせてやりたい。あるいは誰かは言うかも知れない。女優がレースをやるなんて、馬鹿げている。馬鹿にしている。けれど、俺は知っている。

彼女の眼には、一分の遊びも映っていないことを。本気だから、勝てる。

楽園への道筋は、一步の歩みから。

Interlude:Bookmaker.

「何を読んでいるんだ？」

トレーナーさんが私に聞く。

「今度やるホンの原作です。ミステリーなのですが、実は」

「ああその先は言わなくていいよ！ドラマで楽しむから」

「そうですか。……そうですか」

少し嬉しい。予想していなかった。

「本当だ。実を言えばカフェの出るドラマは今まであまり見たことがなかったんだ。でも最近は古いやつも見てるぞ。……カフェのことを少しでもよく知ればいいなと思って」

「演技から私が見えますか？」

私はただの鏡なのに。

「見える……と思う。たとえばあんな顔をあの時もしていたな、とか」

「……同じように演技しているだけかもしれないませんが」

「それは、信じるしかないなあ」

「信じる、とは」

Scene 01:Take me.

「カフェが俺の前で本心を出してくれてるって、信じる」
そんなふうに言われたら、どうしようもない。

Scene02:light and darkness.

いよいよマンハッタンカフェのメイクデビュー当日だ。トゥインクル・シリーズの初戦、正しくウマ娘にとつてのデビュー戦。それがメイクデビューであり、すべての始まり。彼女が待ち望んでいたレースへと、ついに連れてくることができた。

「さて…ようやくですね」

マンハッタンカフェは控え室でコーヒーを嗜んでいた。

淹れたたで湯気が出ているそれを苦もなく飲んでいる。ごく、ごく。コーヒーとはそんなに勢いをつけて飲むものだっただろうか？

黒い湖面に柔らかい唇を沈め、腕を持ち上げて少しカップをあおる。黒い髪と対照的に白い喉が、流れ込む液体の熱さにも構わず蠕動する。彼女はその熱さすら楽しんでるようで、少し脂汗が浮かぶ。

黄金色に輝く眼をゆっくりと閉じて、艶やかな睫毛が顔を覆う。

喉がごきゆり、ごきゆりと音を立てて、彼女は一気にコーヒーを飲み干した。カップをテーブルに置き、こちらに向き直る。水分を含んで黒い彩を湛えた上唇だけが、残滓のように残っていた。

「どうしましたか、トレーナーさん」

……見惚れてしまった。

「ああいや、よく飲むなと思って」

「……私の飲みっぷりはそんなに関心高いものでしたか？ふふっ、おかしなトレーナーさんですね」
彼女は少し、くすりと。…緊張が解けたのなら何よりと思おう。

「さあ、カフェ。頑張ってこい」

初戦。だけど彼女は微塵も油断など見せず。あるのは強者たらんという欲求。

「ええ……お任せを。血に飢えた獵犬のように、レースを制してみせましょう——」
ゆつくりと、彼女はバドックへ向かう。狩りが始まるのだ。

※

血が沸くという表現では足りない。私の全身は何処を切っても噴水のように鮮血が溢れそうなほど。それほどまでに、血が疼く。けれどまだ足りない。レースは一人で走るものではない。同じように熱狂の中にあるウマ娘達を差し切る。喉笛に食らいつき、血祭りに上げるように。

そうしてこの黒い身体を紅く血に染めてこそ、楽園への道は開かれるのだ。

「……あの、マンハッタンカフェさん！」

「はい」

声のする方を見れば、一人のウマ娘が。

「サイン、お願いできませんか!？」

「……ああ」

珍しいことではなかった。ターフの上で頼まれるのは初めてだったが。

「レースの後でもよければ」

「やった……ありがとうございます!」

そう言つて彼女は小さくガッツポーズをしながらゲートへ向かつていった。：ファンであろうと手加減するつもりはない。ここは狩場。闘技場。あるのは喰われるもの同士の喰い合い。それだけだ。

さて。平等に皆、血を喰らわせてもらおう。

※

ゲートに入り、開幕を待つ。ようやくだ。ゴールを目指して、ようやく駆動する。

「スタートしました!」

ばん、という破裂音に合わせて、一斉に走り出す。後方に位置して全体を見渡す。終盤のスパートまでは、ゆつくりと獲物を見張るのだ。……先ほどのウマ娘が先頭か。ちょうどいい。彼女をマークして最後に差す。そこに意識を向けて、身体を風に任せる。気持ちいい。

空の青さと芝の緑。その間を吹き抜ける風は、心臓の鼓動を加速させるようだ。きっと皆、同じなのだろう。ターフを走る者は皆、命の輝きをあらんかぎりに響かせる。……そして。

「マンハッタンカフェ、ここで一気に抜け出す！」

その輝き全てを狩る。この私が。

「マンハッタンカフェ、差し切ってゴール！」

最高だ。久しぶりに、退屈しない。

※

恐ろしいと思った。テレビで見るとは違うとか、そういう次元じゃない。走り切った時、ゴール板の奥でその顔を見た。嗤っていた。眼を細めて、口を歪ませて。舌なめずりをしたようにすら見えた。

サインなんて、頼めなかった。

※

「……ふう」

「お疲れ様、カフェ」

平然と整った息をしているマンハッタンカフェをねぎらう。心なしか高揚しているように見える。「いえ。……おっと、少し目眩が」

レースを終えて疲れてしまったのか、ふらふらとマンハッタンカフェは脚を崩す。危ない！ だから思わず駆け寄ったのだが。

近寄った瞬間、金の瞳が怪しく輝いた気がした。

がしり、と掴まれる。ふらついたはずの脚は俺の脚を絡めとり、しっかりと捕まえている。

「カフェ、何を……っっ！」

鋭い痛みが首元に走る。何が起こったのか、すぐには理解できなかった。痛みのおもむきのある柔らかない感触。少し尖ったものがちくりと刺す。暖かく滑りを伴ったものが俺を舐めとる。……これは、血……!!?

「……んっ……あむ……えお……っ」

マンハッタンカフェは、俺の肩に噛み付いていた。……それも、僅かに血が出るほどに。

「……ふう。トレーナーさんの味、ですね」

感触が首元から離れる。訳も分からず問う。

「……何を、急に……」

「ちゃんと吸いましたから、すぐに止まります。……絆創膏で隠したりなんて、やめてくださいいね？」
確かにもう痛みは引いて、甘い痺れのようなものだけが残っているが。

彼女は一体、何を考えて……。

「さて。ではライブの準備があるので。……次のレース、計画しておいてください」

そう言うって、彼女はまた離れていく。要領を得ない不思議なところはある。でもその実力は本物だ。彼女なら、きつと求めている物を手に入れられる。それが何かはわからなくても、行くべき道はわかっているのだから。

楽園への道筋は、妖しく胎動する。

※

「ライブお疲れ様、カフェ」

マンハッタンカフェ、最初のウイニングライブ。そして最初のレースが終わった。彼女とのトゥインクル・シリーズは、ここから始まるのだ。一着を取ったマンハッタンカフェには、ウイニングライブでセンターに立つ権利が与えられる。勝者の特権。それを彼女は見事完遂した。

「演技の舞台とは、また違う熱狂。血湧き肉躍るとはこのことですね」

ふう、と息を吐く。流石の彼女も少し息が上がっている。……露出の多いライブ衣装も相まって、すこし扇情的だ。

「どうかな、カフェ」

さて、ここはまだ終わりじゃない。

「どう、とは」

「君の望む、なにか。そこに少しは近づけたかな」

きつと、今日では足りない。でも少しは。そう聞くと、カフェはすこし表情を緩める。

「……ああ、そうですね。…不覚にも、少し忘れていました。」

それだけ、私は熱中していたでしょう。退屈を忘れられるなんて、本当に久しぶり」

「それならよかった」

「走り続ける限り、退屈せずに済みそうです。…ええ、おかげさまで」

彼女はそう言って、じつとこちらを見上げてくる。…距離が近くないだろうか。

「次」

その言葉は端的で、待ちきれない己を抑えるかのようで。狼狽えてしまいがら返事をする。

「……ああ、次。次だな。そうだな、弥生賞はどうだろう」

「はい」

クラシック戦線の登竜門的存在。そこから目指すはクラシック三冠だ。…立ち向かうことになるであろう

う強力なウマ娘の存在は聞いているが、それでも彼女なら。

「お望みとあらば」

「……任せてくれ。俺が、君を連れて行く」

楽園へ。それが何で、何処にあるかはわからないけれど。

「……では。そろそろ帰らなければ。明日も仕事があるので」

「大変だな」

「ええ、思いのほか疲れました。次はスケジュールを考えなければいけませんね」

彼女を楽園へ連れて行く。そう約束したのだから。

※

次の日。カフェは仕事なので、今日は作業に費やそう。そう思っていた時だった。コンコンと、トレーナー室の扉が叩かれる。

「お邪魔するよ」

一人のウマ娘が入ってきた。透き通るような瞳を兼ね備えた、少しシニカルな感じのウマ娘。…まさか彼女の側から出向いてくるとは思わなかった。

「アグネスタキオンだ。よろしく」

アグネスタキオン。レース界でも高名な家に生まれた異端児。…今のうちから既に、クラシック三冠は確実とさえ言われている有力ウマ娘。

「よろしく。……タキオンは、どうしてここに？」

「いやなに、ライバルの偵察というやつだよ。有力なウマ娘を探すことは、後々のためにもなるしねえ…」

後半が少し引かなかったが、それよりライバルという単語だ。

「もしかして、弥生賞に」

「ご明察だね。おっと、出走回避はやめておくれよ？嫌味ではなく、これ以上避けられると流石にレースが成立しなくなってしまう。……ところで、マンハッタンカフェくんは？」

「……今日は仕事だよ。彼女は女優業とレースを両立しなければいけないんだ」

「ふうん……」

アグネスタキオンはその言葉を心底興味深そうに受け止めていた。悔るでもなく、恐れるでもなく。ただ純粹に。

「なるほど。カフェくん……いやカフェは女優だったのか。これは驚いた。そういった立場からレースを見ると、どういった世界が見えるんだろうねえ……いやはや面白い」

カフェのことを知らないとは、驚いた。誰もが一言目には、「あの」マンハッタンカフェだと彼女を指さすのに。……これは、彼女にとって新鮮な体験になるかもしれない。

「弥生賞、出るよ。君が出るんなら尚更だ、タキオン」

勝てるかはわからない。けれど、一度の勝敗が全てを決めるものではない。

「いいね。楽しみにしているよ。私もモルモット君に念押ししておこう。マンハッタンカフェの情報を集め

ておくとね」

そう言って、タキオンは去っていった。カフェにとつてライバルとなるかもしれない相手の登場。楽園には一筋縄ではたどり着けないということか。

「よし、やるぞ」

そのまま勢いでカフェに電話する。…すぐに繋がった。ひよっとして俺は専用の番号でも教えられたのだろうか。いやいや、カフェがそこまでする筋合いはないか。たまたまだ。

「……はい、トレーナーさん。まだ傷は痛みますか？」

そんな言葉に軽口を返す。

「カフェが血を吸ってくれたおかげで、なんとか生きてるよ。それより、弥生賞に強敵が出る。三冠確実とまで言われているウマ娘、アグネスタキオンだ」

「ふむ。なるほど。つまり、その人に勝てば良い。そういうことですね」

「……流石カフェ。理解が早い」

こうして、狙いを弥生賞に定めて。マンハッタンカフェとのクラシック戦線がスタートする。

動き出す闇の引力は、超光速を捉えられるか。

楽園への道筋に、波乱が迫る。

何も恐れることはなかった。君が見ていてくれるなら。何も違うことはなかった。君が見ていてくれるなら。私の舞台はどこにあっても変わらない。何個あっても変わらない。

だから大丈夫。きつと楽園へ辿り着ける。

君が見ていてくれるなら。

そう、そのはずなのだ。だから、あり得ない。どこかで何かを盲目的に信じていたけど、信じていたものが何かわからない。

それを暴いたら、取り返しがつかない気がする。だからわからない。わかることはただ一つ。

「アグネスタキオン一着！マンハッタンカフェは四着に終わりました！」

その結果は、揺るがない。ドラマにやり直しはあっても、現実にはやり直しはないのだから。

※

「うん、いいタイムだ。この調子だカフェ」

「……はい。すみません、最近撮影が忙しくて」

弥生賞は着々と迫っている。それなのにレースのために割ける時間が限られてしまうのは心苦しい。君は

Scene 02:Light and darkness.

全てを捧げてくれているというのに。

「いいんだよ、カフェにはカフェのやるべきことがあるんだから」

やるべきこと。トレーナーさんはよくそのフリーズを使う。だから、私は何かを投げ出すわけにはいかない。
「まあ、正直なところ。次の相手はベストでも勝てるか分らない。だから…いや、そんなことを言っ
トレーナー失格だな」

「アグネスタキオン…ですか」

「そうだ」

アグネスタキオン。未来の三冠確実とさえ言われるウマ娘。彼女の出走を受けて既に弥生賞は出走回避が
続出し、私は数少ない出走者の一人となっている。

「……以前、トレーナー室に来たと言っていましたね」

「ああ。ライバルの視察だと言っていたな。その後会ったりしてないのか？」

「……いえ」

アグネスタキオンを名乗るウマ娘が会いに来たという話はマネージャーからも聞いていない。私を見たい
なら私に会いに来るはずなのに。それなら何故、彼女はトレーナー室に？

……まさか。

「……トレーナーさん」

「どうした、カフェ」

「いえ」

心に湧き上がる何かを言葉として処理できず、問いかけは中断される。

「よし、今日はこの辺にしよう。お疲れ様」

「お疲れ様です」

これが不安だとすれば、何に対する不安なのか。答えは導き出せず、ただ日数が過ぎる。

「……負けるわけにはいかない。君が命ずる通り、私は全てを喰らう」

そう何度も、何日も。願うように口にする。ただ、君が見てくれるなら。それが私の祈りなのだから。

※

わからない。意識をここまで巻き戻しても、この結果を認識できない。

「ふう……お疲れ様だね、カフェ」

「……そのように親しげに呼ばれるような覚えはありませんが、アグネスタキオン」

「それは申し訳ないね。…時に君」

「……なんでしよう。敗者に情けの言葉でもかけるのですか？それなら結構。私は——」

「これが情けだと取られてしまうなら申し訳ないが。……その調子じゃ春いっぱいは無理だね。休暇をトレ―

ナーに嘆願した方がいいよ。……おっと、副業もあったかな。それもだ」

「なに、を」

何を馬鹿な。何をわかっているというんだ。何を、なにを。言葉は空を切り、ただ己の身体を鑑みる。力は、明らかに入り切っていないかった。でも、私に休むなんて。

「助言の類ではなく、警告だよ。…走れなくなっただけは元も子もない、だろう？ こういう目については一家言あるのさ」

「私には、トレーナーさんとの約束が」

楽園へ行く。そのためには、一歩だつて止まるわけには。

「……とにかく療養することだね。走れる刻は永遠ではないとしても、その時間を伸ばすことは重要だ」

そう言つてアグネスタキオンは立ち去る。このレースの主役は彼女で。私はただ、それを見ているだけの黒子だった。

※

「……お疲れ様」

劳いの言葉。私はまともに答える価値もない。

「気休めは要りません。全力を出せなかつたが故の結果です」

「そんなことは……！」

「……少し、一人にさせてもらえますか」

邪険に扱い見捨てられるしか、方法がない。

「……わかった」

トレーナーさんを追い出して、控え室に一人。私は敗北を嘔み締められなかった。私の牙は勝利のためにだけ生えていて、挫折を飲み下すようにできていなかった。

「うまくいかなかった。だから私のこの生活には、無理がある」

そういうことだ。アスリートと女優の両立。そんなものは不可能なことで、まだ密室殺人の方がありふれている。

「……違う」

違う。それが出来ないのは、己が無力だから。もっと、もっと。退屈を埋めるほどのワーカホリックが、私を見る世界には必要だ。それに身体が耐えきれないとしても、そんなの。

「もしもし。休暇を取ります。よろしくお願ひします。……何と噂を立てられようと、構いません」

マネージャーへ休暇の連絡を入れる。文句を言われても構わない。どうせ事実だから。

私が耐えられなかったのは、事実だから。

「……それでも、レースは」

休みたくない。完全に休むべきだとしても、こちらは手を離したくない。全身の疲労は、数日分一気にの

Scene 02:Light and darkness.

しかかってくる。でも。

「臯月賞を、目指す」

よろめいてしまうのは、今回の疲労のせい。まだ、私は喰らいつける。さあ、トレーナーさんに心配をか
けた。何事もなかったかのように出ていかなければ。

……そこで、意識は途切れた。

※

「……これは、過労ですね。しばらく休ませた方がいい」

「……わかりました」

こえがきこえる。あなたのやさしいこえ。

「……トレーナー失格だな、俺は」

なかみはわからないけれど。あなたのこえは、あんしんする。…また、ねむくなってきた。

「……ごめんな、カフェ」

そうだ。わたしもあやまることがあったのだ。

「タキオンとのレースのことばかりで、君の体調管理を忘れるなんて」

まけてしまっごめんなさい。

「……次があるなんて思わないよ。お別れをしよう。君をレースに連れ出すなんて間違ってた」

つぎは、かちます。だから――。

楽園への道筋は、黒き闇に閉ざされた。

※

私たちの道のりはまだ始まったばかりだ。ようやくオーブニングが終わるところなのだ。開幕戦を終え、ライバルとなるべき相手を見つけた。だからまだ走る理由はある。

そうであるべきだ。そうでなくてはいけない。

「……ここは」

白い天井。身体に力が入らず、状況を把握できない。私は弥生賞でアグネスタキオンに負けて、それで。

「ここは、病院だよ。…カフェは控え室で倒れてて。運んできた」

「それは、申し訳ありませんでした。ありがとうございます」

「申し訳ないのはこっちのほうさ」

「どういうことですか」

「医者は過労だと言ってた。働きすぎたんだ。頭張りすぎてたんだ。俺が止めるべきだった」

否定の言葉を発するほどの元気もなかった。頭にも身体にも血が足りない。喰らう獲物を失って、みすぼ

らしく飢えている。

「……だからさ、カフェ。これで終わりにしよう」

「それは、どういう」

「君には大事な仕事がある。今まで培った生活がある。俺とのよくわからない約束なんかに惑わされず、レスは辞めよう」

声がかすれる。反論を返せない。

「それが、俺からできる最後の指導だ」

なんで。どうして。答えの分切り切っている問いは、口から出て行こうとしない。

「……じゃあ、これで。さよならだ」

私の沈黙を肯定と受け取って。君は病室から独りで出ていった。

「ねえ」

「連れて、行ってよ」

一つとして、言葉は届かない。

※

それから。病室に来たのは、共演していた俳優だとか、マネージャーだとか。そういう人たちがばかりで、レ-

スと私の縁は途切れてしまったようだった。でも、忘れられない。血を求める感覚は、私の中で強く強く。そんなある日のことだった。

「こんにちは、カフェ」

「……あなたですか、アグネスタキオン」

本当に求めている人ではなかったけれど。あの世界と私がまだ繋がっている気がして、少し嬉しかった。

「今度の皐月賞だけど」

「出れません。出ません。私は走れない」

「そんなことは知っているよ。だからお見舞いに来たんじゃないか」

クククつと、アグネスタキオンは笑う。けれどその深層に、愉快そうな感情は見えなかった。

「残念だったなどと言うつもりはないよ。そういったお節介は聞き飽きているだろうしねえ……」

「要件は。皐月賞に何か」

「私は皐月賞に出る」

「……ああ、そんなことですか」

分かり切ったことだった。弥生賞を勝っておいて出ない選択肢もあるまい。そして彼女がその後のダービー、菊花賞を勝ち取るのさえ。分かり切ったことだ。けれど。

「君には見てほしい。できれば君のトレーナーにも……と思っただが。居ないようだね」

その口ぶりは真剣なもので。まるで、できたばかりの硝子細工を触るかのよう。壊れかけの硝子細工を

Scene 02:Light and darkness.

愛おしむように。そんな印象を与えた。

「……わかりました。トレーナーさんも呼んでおきます。まだ連絡はできますから」

「何かあったのかい」

「……これは私の問題です」

私が耐えられなかったから。弱き獣には何の権利もないのだ。

「……ふうん。それなら今すぐ呼んでくれるかな。君の問題だと言うのなら、トレーナー君は何の問題もなく元気にしているのだろうか？きつと暇をもてあましているに違いない」

「その通りですね。お任せを」

手荷物の中から一つの携帯電話を取り出す。

「流石女優だねえ。連絡用とプライベート用で通信機器を分けてあるのか」

「……これは」

「これは？」

「……いえ」

これは、君専用の電話。君の番号だけが閉じ込められた優しい牢獄。だけど今はもう、飛び去ってしまった。

「……もしもし」

「……お久しぶりです。マンハッタンカフェです」

「久しぶり」

心臓が熱くなる。再び血が流れ出すような。

「……今度の皐月賞。一緒に見ませんか」

「……いいのか」

いいも悪いもない。

「……続きは、その日に」

私が生きていくのには、君が必要なのだ。

※

「……そろそろです」

「タキオンが君に言ったんだったな。皐月賞を見てくれと」

久々に君と話せるだけで、嬉しい。彼女には感謝しなくては。

「各ウマ娘、スタートしました！断然一番人気のアグネスタキオン、光を超える素粒子の名を冠するウマ娘はどう出るか！」

「……まさに好位追走だな」

アグネスタキオンは中団、先行バとして理想的な位置からレースを進めていた。彼女にはおそらく勝利の可能性が眩いほどに見えている。

「……彼女の見る景色とは、どのようなものなのでしょうね。確実に勝てるとさえ言われ、その重圧をも跳ね除ける」

本物のスターダム。星より疾い超光速の景色が、彼女の眼前に。

「……君にだって、見える」

「私には見えませんよ」

君が、連れて行ってくれないければ。

「……アグネスタキオン抜けた！アグネスタキオン一着！アグネスタキオン、まず一冠です！」

やはり、彼女は勝った。これを見せてどうなると言うのか。彼女は走れて、私は走れない。その現実を突きつけたかったのか。

その疑問は、すぐさま明らかになった。

※

「私はダービーには出走しない。未来の三冠ウマ娘のインタビューが聞きたかった諸兄は残念だが、これはもう決めたことだ」

「なん、で」

耳を疑う。そんなこと一言も言っていなかったではないか。彼女が扱っていた硝子細工は、彼女自身だったとも言うのだろうか。

「……きつとこれを見てくれている彼女に、Bプランを託す。追って詳細は発表しよう。では」

騒然となる会場を後に、アグネスタキオンは去っていった。…ライブにすら彼女は現れなかった。脚に異常があつたということだろう。でもそれ以上の覚悟が、彼女の語気には込められていた気がした。

「Bプラン」

その詳細は不明だが、その託す先はわかる。

「トレーナーさん」

私にまだ走る理由が、走らなければいけない理由が生まれた。

「あなたがなんと言おうと、私はまた走ります。協力して貰えますか」

そして、そのためには。

「わかった」

君がいてくれなくてはいけない。

ここより始まるのは、最初の約束を忘れたかのような一方的な契約。その形は歪んでいて、壊れている。でも、私を見ていてくれるなら。私は、それでいい。

失楽園の漆黒は、閉ざされし闇を喰らう。

Interlude: Rainy day.

雨が降っている。雨が創る物語というのはなぜ悲しいものばかりなのだろう。雨雲は不安と不吉を予感させるからか。雨の後の虹は爽やかな別れを連想させるからか。

「……はうう、ライスがお祈りするといっつも雨だ……」

道すがら、一人のウマ娘を見つける。彼女も雨に悩ませているのだろうか。

「……あの」

「……はい！……って、マンハッタンカフェさんですか！？あの、私あの映画観ました！『幸せの青いバラ』……」

私がナレーションをやった映画だ。

「そうですか、ありがとうございます。……あなたは、雨は好きですか？」

「……えっと、ライスは……その。嫌いじゃないんですけど、いつも降らせてしまってるのが迷惑かけてるかな……って」

「……そうですか。あなたが好きでいられるのなら、雨もきつと応えてくれますよ。あなたの世界の主人公はあなただから、あなたは何者にでもなれる。迷惑だなんて思っはけません」

現実と物語は違うのだ。全てに因果があつて、全てに因果がない。

「ライスも、ヒーローに……」

「お名前を聞いていませんでしたね。覚えておきます」

「……はい、私の名前はライスシャワーです！」

祝福の名を冠するウマ娘。彼女の創る雨は、悲しくない気がした。

Scene03:Summer in the midnight.

今日から夏合宿。俺の担当ウマ娘であるマンハッタンカフェも、合宿からは復帰できるということで待っていたのだが……。

「遅いな」

このままではバスに乗り遅れてしまう。電話をかけようか、と携帯を取った途端着信があった。∴相手はカフェではなく、アグネスタキオンだ。

彼女から電話をかけられるのは初めてのことではない。カフェのことについて、タキオンは都度連絡や提案をしてくれる。彼女が皐月賞で言った㊦プランというものにその理由が隠されているのだろうか。

「……というわけで、夏合宿中はスタミナの強化を……聞いているかい？」

「ああ、ごめんごめん」

「やれやれ。まあ私がやっているのもお節介に過ぎないし。まあ、夏合宿中はカフェのために尽くしてあげることだね。彼女は君にご執心のようにだからねえ∴それじゃあ」

そう言っただキオンは電話を切る。∴俺なんかがカフェのためにできることは少ない。だからタキオンのアドバイスも何も言わずに聞いている。

「カフェが俺に執心している、か」

それは冗談のようなものだと、実際彼女は何のためにまた走っているのだろう。俺は約束を果たせる人間ではないと分かったはずなのに。…本人に聞くことはできない。それは彼女に気遣わせてしまう結果になるだろうから。

「……電話は終わりましたか」

「ああ……って。……カフェ、か……？」

振り向いた先にいたのは、幻想のような。

「きつと暑いと思ったので、服を新調してきました。……どう、ですか？」

思えば、彼女はいつも着替えてからか、あるいは変装して練習に来る。そんなマンハッタンカフェの私服を見たのは初めてかもしれない。

いやこれは私服なのか？黒く伸びる長髪に影を作る大きな麦わら帽子に、白い肌とまじりあうような純白のワンピース。露出は少ないけれど、薄い生地から少し身体のラインが見え隠れしている。

「珍しいものを見るような目ですね」

どきり。思わず見つめてしまっていた。慌てて焦点をずらし、なんとか平常に対応する。

「あーそうだな、みんな制服だからな。確かに珍しい。うん。まあでも問題はないだろうな」

「……そう、ですか」

うん、制服じゃないといけないこともないだろう。それに。

「これだけ似合ってるのに、脱がせるなんて可哀想なことは誰もしないよ」

そう口走ると、僅かにカフェの頬が緩んだ気がした。

「では、行きましょう。そういえば電話がつながらなかったのですが、どなたと電話を」

「ああ、タキオンと電話をしたんだ。いつものことではあるんだが、タイミングが良くなかったな：カフェと被ってしまった。すまない」

「……そうですか」

それだけ。珍しく質問をしてきたと思っただけ、その返答は淡白でよくわからない。もっと彼女のことを知りたいと思う心は、間違いではないと信じたのだが。

……ともかく、カフェのリハビリを兼ねて。また勝ちに行く、その願いを込めて。

夏合宿が、スタートした。

※

「よし、上々だな」

「はい」

「目標は、菊花賞。長距離を走るスタミナをつけるんだ。菊花賞はただの復帰戦じゃない。重賞初勝利だ！」

「菊花賞」

クラシック三冠の最後の一つ。少し前までは、あのアグネスタキオンが確実に取ると言われていた。それを、マンハッタンカフェは射抜く。射抜かせてみせる。

「……あの」

「どうした、カフェ」

「この後、時間があれば」

ある、と答えた俺に伝えられたのは、予想外の仕事だった。

※

ざざん、ざざん。砂浜に二人。本来なら休憩時間のだが、マンハッタンカフェにはもう一つの仕事がある。女優業はしばらく休んでいたカフェだが、今度写真集を出すらしい。曰くそういうもので収入を持続させることが大事なのだとか。…というわけで。

「えっと、こんな感じか？」

「……んっ……」

「ああ、悪い！」

「……いえ、なんの問題も」

俺はカフェの背中に日焼け止めを塗っていた。彼女はトレーニング用のスクール水着とは違い、パレオの

ついた可愛らしい水着を身につけている。……その格好で日焼けしないようにするのが、俺の仕事だ。

「……なあ、同室のユキノビジンとかに頼むのは」

「これも仕事の範疇です。友達時間を割くわけにはいかないのでしょう」

確かに俺は友達ではないが、いかなものか。そんなことを口に出したりはできず、丁寧に：薄目で確認しながら。色白の肌は、光を反射するよう。闇を孕んだ髪の毛とは対照的だった。生唾を飲み込みそうになる自分を、すんでで止める。ただただ、綺麗だと思った。

「……なあ」

「なんでしょう」

ほんとに触っていいのか、などと馬鹿なことを聞きそうになる。代わりに質問を捻り出す。

「どうだ、調子は」

ありきたりすぎる。

「ええ、それなりに。おかげさまで」

おかげさまという言葉が少し刺さる。結局俺は彼女に特別何かできたわけではないと思う。彼女が走るからそれを助けられるだけであって、彼女が走れない時の助けにはなれなかったのだから。

「さて、こんなもんだ。ところで撮影は」

「それも、トレーナーさんが」

えっ。

「身近な人が撮るありのままの姿、がコンセプトなので。カメラはここに」

あまりに平然と言うので、やはり女優というのは常識が少し違うのかも知れない。そう思った。

※

「はあ、流石に疲れた……おやすみカフェ」

「……はい、おやすみなさい」

「一応鍵を渡しておくから、何かあったら起こしてくれ」

「……はい、ありがとうございます」

そう言って俺は寝室に帰る。この夏合宿、彼女は強くなれただろう。けれどそれは彼女の功績で、俺の力ではない気がする。無力さに打ちひしがれながら布団に入る。

彼女と契約したのがもう遠い昔のような気がした。あの頃の俺は何も知らなかったのだろう。今は知っている、だから何もできない。だとしたら。

「……もう一度、できるようにならないと」

彼女との契約は理由がどうあれ続いている。彼女に相応しい存在になれるように努力しなければいけない。

彼女が走ることを、間違いでないと証明したい。

そんな決意とともに。俺の意識は闇に沈んでいった。

※

憎いという表現は適切ではない。そもそも感情を真に一言で表すのは不可能に近い。

文章に起こされた動作の中から書かれていない感情を描き出す。その所作を、女優として何度もやってきたからわかる。

思い出す時点で感傷は欠落していて、その時得た感覚は不完全にしか復元できない。

トレーナーさんがあのアグネスタキオンといつも電話していたと聞いた時に抱いたものは、なにか。何か暗いものであり、焼けるように熱いものであり。純白のおめかしが一瞬で色褪せてしまったような気がした。

君の存在を閉じ込めたいという願望はどこかにあるかもしれない。けれどそれは本当に言葉にするならまた違う形であり、だから実行できない。たとえば肉体的接触で君を手に入れることができるのだろうか？

私の肌に触れた君は何かを感じたのだろうか？少し満ちた気分はあつたけれど、まだ満たすには足りない。渴き、飢える。たとえば写真に姿を閉じ込めれば、その人の姿は手に入る。君は私の写真を撮って、私を手に入れられただろうか？そうであつたら嬉しいけれど、君は私を求めてはいない気がした。

もやもやと、曖昧に。眠れないという結果が積み重なり、感情は論理を求めない。ただ発露されることだけを渴望する。

だから。私は今、トレーナーさんの寝室にいる。退屈で、退屈で。それを満たして欲しいから。君だけが、私を満たせるから。

「……すう……」

何も知らずに寝ている君を、眠るように殺すことは容易いだろう。そう考えるとぞくぞくしたけれど、それは本当に求める何かではない。君の生殺与奪の権利を握っていることを、もつと実感したい。君がいなければ私が死んでしまうように、私がいなければ君は死んでしまう。

そういうふうには、したい。

ゆっくりと、近づく。その顔を眺め、闇の中で堪能する。…そういえば、スタミナだったか。どれだけついたか、試してみようか。

「……すーっ、はむっ……」

それは口付けではなく、息と息を繋げる行為。肺と肺を口で繋げて、君が吸うのに合わせて、私は吐く。

「……ふーっ、すーっ……ふーっ……」

乾いた君の唇に、私の唇から水分をもたらす。君が起きる気配はない。私が息を止めれば、君は死んでしまうのに。

「……ふう……あむっ……はー……」

いつまで続けられるだろう。僅かに体温が移り変わり、熱っていく。口は片時も離さない。この時間が、

永遠だったらいいのに。生まれて初めてそう思った。

※

「……んー、よく寝たなあ」

寝間着が汗でびっしょりだが、なんだか気持ちのいい睡眠だった気がする。唇がやけに暖かいような。けれど心当たりもなく、寝ぼけ眼で部屋を出る。…カフェがいた。

「おはようございます」

「おはよう、カフェ。よく眠れたか？」

「眠らないように頑張っていました」

「えっ？」

「……冗談です。さあ、最後まで。頑張りましょうか」

最後まで。その言葉を、最後まで聞けるようにしよう。そう思う。彼女はまだまだ走れるのだから。失楽園の漆黒は、真夏の闇に揺蕩う。

Interlude:Fan letter.

「……トレーナーさん、ファンレターです」

「やけに嬉しそうだな」

「……そうですか？私としては見慣れたものですが」

そうではない。

「トレーナー室に届いたつてところが重要なんだろ？」

流石トレーナーさん、よくわかっている。

「……まあ、そうですね。私の、走り、へのファンレター。きっとそれは、大切な初めての」

思えば、女優として活動し始めた時も。最初のファンレターは得難い希望に見えた。今では滝のように降ってくるそれも、どれも心がこもっている。

「……ちゃんと読まなければなりませんね」

今まで貰ったものも。初めて貰ったものも。どちらもマンハッタンカフェへのファンレターなのだから。

Scene04: Conquering, and to conquer.

息をする。私は二酸化炭素を口の中から捨てて、新しい酸素を取り込む。息をする。私はこの場に広がる空気を吸い込み、そこに自らの空気を撃ち出す。息をする。まるで血を啜るかのように。息をする。狩場に蔓延る獲物たちへと口を開く。脚は自然と動く。

ゆっくりと、ゆっくりと。後方に位置して様子を伺う。心は牙を研ぐ。既に狙いは定めている。集団から抜けて一人逃げている彼女。わかる。

彼女はきつと、勝つ。皆に勝つ。私以外の、皆に勝つ。だから。

私は彼女さえ捕らえればいい。レースとは時にシンプルだ。徐々に、徐々に。集団が前へと移動し、私はその中でゆっくりと位置を進める。

菊花賞。3,000mという距離は、あらゆるレースの中でも随一の長さだ。長距離のレースで勝つにはスタミナが必要。それは私も夏合宿で言われたことだし、きつと今走る皆知っている。けれど。

私はもう一つ、この距離での勝利に必要なものを知っている。そしてそれについて、私は負けるつもりはない。この場の誰にも、いや。全てのウマ娘にも、だ。勝ちたいというのがウマ娘の本能。だから私たちは走る。そう言われている。でも、私は。ずっと走らなかった。

走ること以外の人生に身をやつし、人生の退屈さをどこかで埋め合わせしようとしていた。私にはもしかするとその本能が備わっていないのかもしれない。レースの話聞いても、血湧き肉躍ることはなかった。面倒だ、とさえ思った。

そんな私が今走っているのは。君が。君が、私を連れて行ってくれるから。私はその命に従って、走り出す。楽園へと黒く羽ばたく。

「さあいよいよレースも終盤！先頭から二番手以降は馬身ほど離れています！マンハッタンカフェは中団から徐々に上がってきました！」

もうすぐ、もうすぐだ。全ての敵を喰らい尽くし、私が屍の頂点に座する。瞳孔が開き、薄く笑みを浮かべる。マンハッタンカフェにとつてのレースは狩りに等しい。

首を掠め取るように抜き去り、一瞬で喰らい尽くす。命奪に必要なのは刹那の切れ味なのだ。

私が、長距離において負けないと自負する理由。それは――。

「内からマンハッタンカフェ！内からマンハッタンカフェ！差し切るか！躲せない！マンハッタンカフェゴール！菊花賞の栄光はマンハッタンの手に！」

長い雌伏の時を知っているから。目の前の勝利を渴望することはできても、視界の外にあるゴールを目指し続けることは難しい。そこは本能の埒外で、誰もが集中力を切らして苦しみに耐え抜けない。

でも、私は違う。私は今も苦しみの中にいる。常に遠い遠いゴールを目指している。その中でたった3000を走り切ることなど雑作もない。いや、雑作もなくてはいけない。

ワアアアア——。

大歓声が私を迎える。…息を整え、スタンドに向き直る。彼らは私を見ている。私自身を見ている。その感覚は新鮮で、得難いものだと思った。…ここが、楽園に近いのだろうか？この歓声を浴びる一着の場。そうであるなら、嬉しい。

楽園への道はまだ閉ざされていない。君はもう私を見限って、ただ言われるまま私に着いてきてくれるだけなのかもしれない。それでも、そうだととしても。今日のこの勝利は、私と君のものだ。

※

「マンハッタンカフェさん！重賞初勝利、それも菊花賞で！おめでとうございます！」「マンハッタンカフェさん、女優業との両立についてインタビューを是非」「マンハッタンカフェさん、何か一言」

やれやれ、せっかくの気分が台無しだ。喜んでもらえるなら結構だが、これは君以外の誰かと分かち合うための勝利ではない。胸の内を明かす相手など必要ない。

「次は」

「次は有馬記念を目指します。では」

この一言で、充分だ。

「……お疲れ様、カフェ」

「ありがとうございます、トレーナーさん」

「すごいな。あんまり息が上がってないみたいだ」

「ええ。でもそろそろ、喉が渴きました」

「ああ、それなら……」

かぶり。

「……つつ……！」

ちゅう、ちゅう。

「カフェ、いた、痛い……」

「……痛いですか？」

それは素晴らしい。首筋の噛み跡を新しいものに上書きする。溢れ出る血で喉を潤す。

「これで。傷が疼くたび、私のことを思い出せますね」

唇の血を舐め取り、口角を持ち上げる。気分が安らぐ。君に勝利を捧げられる、そこに私の価値はある。

「……それより、カフェ。次は有馬記念って、本気か？」

「不服ですか？」

「いや、まだ信じられなくて。でもそれだけの力はあるよなあ、うん、うん」

信じられない、という言葉がピンとこない。私は実力不足に感じられるということだろうか。少し気落ちしてしまう。するとそれを察してか、トレーナーさんが発言を訂正する。

「ああいや、そうじゃない。俺が有馬に出走できるようなウマ娘の担当になれるなんて信じられない、思っ
て。ありがとう、カフェ」

「いえ、それほどのことは」

私は本当に、大したものではない。

「トレーナーさんがいてくれたからですよ」

「……そうか」

私の言葉はどうして君に届き切らないのだろう。歯痒さが身を包むけれど、どうすることもできない。

「まあ、そうと決まれば。時間は短いけど、頑張らないとな」

「ええ、お任せを」

こうして、次なる指針は定まる。

傷だらけの船はその傷を闇で覆い、血を流しながらもまだ進んでいる。

失楽園の漆黒は、闇より目覚める。

有馬記念。一年の最後を締め括る大レースであり、シニア級とクラシック級のウマ娘が一堂に会する。つまりマンハッタンカフェにとつてはシニア級チャレンジの登竜門となるべきレースなわけだ。

「やあ、こんにちは。まずは菊花賞おめでとう」

電話をかけてきたのはアグネスタキオン。今年の皐月賞を勝った強力なウマ娘であり…今はレースから身を引き俺とカフェのサポートをしてくれている。

「ありがとう、タキオン」

「……で、次はどこを射抜くんさい？」

次の勝利。アグネスタキオンにとつては手に入りそうで手に入らなかったもの。どんな気持ちでその言葉を紡いでいるのだろうか。

「次は有馬記念だ。カフェがそう言った」

「へえ……。彼女にも一厘の積極性が見えてきたかもねえ」

「彼女はいつだって真剣だよ」

彼女から逃げたのは俺の方だ。

「いや……まあいいか。姑役をするために君たちに関わっているわけではないし……ふむ」

電話の外からばらばらと紙を捲る音が聞こえる。

「さてさて、君はシニアの有力ウマ娘を知っているかい？有馬に出走するなら当然同世代だけに注目してい

てはいけない」

「特に注目しなきゃいけないと思ってるのは……二人だな。ライバル関係にあり、一着二着を独占してシニア級を暗黒で染め上げたというウマ娘たち」

「さすがだねえ。君もカフェのために努力を惜しまないというわけか」

「そうでもない。俺が彼女のために出来ているのは最低限のことだけだ。全力を尽くしても何にもならない。彼女の道標という最低限の役割すら果たせているか怪しい。」

「……テイエムオペラオーと、メイショウドトウ。少し衰えが見えてきているとはいえ、他の追隨を許さない存在だろう。スターウマ娘に近い」

「世紀末霸王と怒涛王。二人の王がシニア級の壁として立ち塞がる。勝てなくても仕方ないとすら言える。……けど。」

「勝てるかはわからないかもしれない。でも。勝てなくても仕方ない、って思うのはもうやめたんだ」

「ふうん……」

「俺は、今でも。カフェなら君に勝てたと思ってるよ。タキオン」

「それは仮定の話、だね」

「過去の話さ。体調管理をしっかりしていれば、今日のパフォーマンスが出せるなら。カフェは誰にも負けない」

「負けるとしたら、全て俺が悪い。」

「それが君の信頼の形」

「そうだ」

「なら見せてもらおうよ。私の幻影を追いかけるといふならそれでもよし。なんであれ勝利すればいい……じゃあ」
電話が切られる。勝利。そのために、必要なものは。

※

「ふう。ウイニングライブというのは体力を使いますね」

センターに立つのはメイクデビュー以来か。観客の数は段違いだったけれど、私にとっては差がない。どちらも君が見てくれている。その一点が重要だ。

「んっ……ごっくっ……ふう」

黒塗りのコーヒーをじっくりと飲み、疲れた身体に鞭を入れる。一人の空間は落ち着く。昔はこれが一番好きだった。今はもう少し好きな空間があるけれど。

私の独奏。人生は独りによって動かされるものだと思っていた。揺れ動く何かをあくまで自分が捉え、それを命の糧にする。退屈を噛み殺すには自分から動かなければならない。獲物を捕らえるには自分の働きが必要である。

私の独創。だから、私は私でいる。私にしか創れない人生があつて、それはつまらなくても私の価値を担

保する。他者とは違う、他者とは関わらない。それが私を生かしている。

けれど。今の私には。君とのデュエットが必要だ。君と二人で創る何かが必要だ。そうでなくては退屈だというのは、私に課せられた呪いなのかもしれないけど。この呪いは心地よいのだから構わないと思う。獣であるためには私たちは餌を多く喰らわねばならない。

二人でいる方がより多くの餌を得て強い獣になれるというのなら、私は喜んで二人になる。しかしそれなら果たして。餌を分け合うことが弱さに繋がるとしたら、私は君と分たれるべきなのだろうか？

「……いけませんね」

今日は勝利に酔うべき日だ。それなのに不穏なことばかり考えてしまう。偶像の蠢く未来ばかりを描いてしまう。しっかりしなければ。君の隣に立つのに、相応しくならなければ。

「……カフエ、入っても大丈夫か？」

「ああトレーナーさん、どうぞ」

そう言ってトレーナーさんを招き入れる。部屋に二人きり、その状況は少し心を揺らしてくれるけれど。まだ、私は相応しくない。

「有馬記念、警戒すべきはテイエムオペラオーとメイショウドトウだ。歴戦のウマ娘で、実績も実力も申し分ない」

「なるほど」

「でも、」

「勝つのはカフェだ。それを伝えに来た」

「ええ、お任せを」

当然だ。君がそう言うのだから、私は勝つ。今の私の行動指針は、全て君の中にある。

「……トレーナーさん」

「……なんだい」

「……まだ、連れて行ってくれる？」

「……ああ。約束したからな」

約束した。君は私を楽園へと連れて行く。それを脅迫材料にするかのように、今の私は君を繋ぎ止めている。

きっと君の心は私をもう見たくない。

でも、私は君に見て欲しい。君のためを思うには、私は弱すぎる。君を求めなければ直ぐに死んでしまう。

「じゃあ、帰るか」

「トレーナーさん、もう一つだけ」

「……いいぞ」

「……今日は、独りになりたくない。朝まで、手を。繋いでいてくれませんか」

これも脅迫のようなものだ。きっと求めるほどに、君は私に恐れ慄く。心は離れていく。

「わかった」

それなのに、君は私を赦してくれる。私はいつまで君に甘えられるだろう。きっとこれも永遠ではなく、

いつかは退屈極まりない私の存在を見限る時が来る。でも、それまでは。

※

「ここが私の家です」

「……なあ、大丈夫なのか」

私の家はトレセン学園の寮とは離れたところにもう一つある。女優業ばかりをしていた頃の古巣だ。

「なんですか。今更手を離したりはしませんよ」

君の手は私の掌の中に。

「言いましたよね？朝までって」

「言ってしまったしなあ。……カフェが大丈夫なら、いいよ」

勿論。

「ではいらっしやい。風呂とご飯を用意しますから、寛いでいてください」

ぎい、と扉を開いて。一瞬、愛の巣という言葉の葉を幻視する。そうでなくても、この時間は誰にも邪魔されたくない。

失樂園の漆黒は、闇へと手招きするが如く。

「大きな家だな」

マンハッタンカフェの別荘は大きな一軒家で、彼女が人気女優だという事実を再確認させられる。

「私は狭くて暗い家でも良かったのですがね」

カフェはそう言う。この家は彼女の好みで選んだものではないのだろうか？

「ただ、広い空間で独りになりたい時もありますから。開放的なようであり、牢獄のようであって。退屈を

殺すためには、様々のものを体験しないとけません」

ばち、ばち、ばち。明かりのスイッチを入れて、カフェは奥の部屋へと入っていく。

「……とりあえず、着替えさせてもらいます。……トレーナーさんは」

「ああ、俺はいいよ！ そうだな、そこで座って待ってる」

着替え部屋に誘うなんて、冗談でもどきりとしてしまう。しばらくすると、彼女は装いを変えて出てきた。

ルーズな部屋着。少し緩い雰囲気は、今までの彼女にはなかったものだった。

「では、食事を用意しますね。ごゆるりと」

「ああ、ありがとう」

そのまま彼女はキッチンに消え、間もなく包丁でまな板を叩く音が聞こえる。…カフェと包丁の組み合わせはなんだかマッチしている気がした。

カフェの家をぐるっと見回す。彼女の私物が全面に広がっていて落ち着かない。

「気になるものがあつたら、ご自由に手に取ってください」

そうキッチン越しに言われたので、大人しく目に付くものを見てしまう。

※

「大きな本棚だな」

ずらりと小説が並ぶ。演技の本などもあるし、果ては犯罪者のプロファイリングや実在の事件をまとめた本まで……これは一体。

「ドラマは現実ではないですが、作中の人間は現実においてもおかしくない思考を持っていなければなりません。それは悪役でも然り。私はそれを映し出す鏡ですから」

「君にとっての女優業は、フィクションに現実を憑依させること？」

「ご名答。さて、続きはシチューと共に」

いつのまにか彼女は鍋に入ったシチューを机に置いていた。家の中を回っている間にそれなりに時間が経っていたようだ。

「いただきます」

「……召し上がれ」

彼女と二人、食卓を囲む。今夜は一人になりたくないと言った。だから俺はここにいるけれど、彼女はどれほど俺を信頼しているのだろう。期待外れなトレーナーでしかないはずなのに、俺は彼女を縛ってしまっているのか。

「美味しいな」

「それはよかったです」

身体の芯から温まる。彼女の得意料理なのだろうか。

「女優について。私は女優であることを、物語の鏡になることだと思っています」

「……鏡」

「限りなく物語を落とし込み、私から私を消し去る。それが役割で、だから私個人には何の色もついていない。白黒の無価値。そう思っていました」

それは何となく、初めて誰かに話すかのような。

「でも、今日の菊花賞。歓声は私に向けられていた。私自身に向けられていた。…初めての世界でした」

「そうか、それは」

「トレーナーさんのおかげです」

虚をつかれた思いがした。

「トレーナーさんがいたから、連れて来てもらえたんです」

「……違う、」

「俺なんか、足手まといだろう」

「そうに決まっている。そう言うと、それ以上の言葉は交わされなかった。」

※

「これ、私のお気に入りのコーヒーです」

「ありがとう。いただくよ」

悪いことをしただろうか。彼女は未だに俺に幻想を抱いているのだろうか。それでも、それでも。彼女が走る理由は俺にある。そうだとしたら、俺のするべきことは。

「さて、お風呂はもう湧いていますか。どうしますか、トレーナーさん」

「どうって……」

「……入りますよね？」

正直いくら担当とトレーナーの関係だとしても、女性の家で風呂まで借りて良いものなのだろうか。「安心してください。風呂場で襲いかかったりしませんよ。先、いただきますね」

それは冗談のはずなのだが、そうは聞こえなかった気がする。

彼女が風呂に入っている間、一人先程の言葉を思い返す。俺がいたから走れたと彼女は言った。俺なんか足手まといだと俺は言った。どちらが正しいのだろう。ここに嘯み合いがないことは、俺たちにとって致命的なことなのだろうか。

いくつか漠然とした疑問は浮かぶが、答えは出ない。答えを出したくないのかもしれない。俺にだけ落度があれば、それは俺の問題になる。そこに疑問を挟み込みたくない。

そういうことだ。

連れて行く。俺が彼女を連れて行く。その約束をまだ彼女は握りしめている。それは既に壊れたる幻想なのかもしれないけど、確かに彼女を生かしている。

「先、いただきました」

もう少しだけ、考えてみよう。俺たちのことを。

「……ああ、ありがとう……」

そんな考え事をしていたので。

「……あつ、まだ振り向かないでくだ……きゃっ！」

「あつ、ご、ごめん！」

あられもない白い肢体が目焼き付くのを、必死に堪えた……。

※

「着替えは外に用意してあります」

「……ごめん、カフェ……」

風呂のドア越しに会話が為される。ここは自分の家ではないのに、気を抜きすぎていた。…そもそも何故カフェは俺を自らの家に誘ったのだろうか。やはり、それだけの信頼が寄せられているのだろうか。その理由があるとすれば、結局トレーナーである自分との契約に帰結する。

ざらりと並ぶコンデイションナーの列から、ボディーソープとシャンプーを取り出す。当たり前だが美容には気を遣っているようだ。彼女が女優だから……というのものもあるだろうが、それ以前にマンハッタンカフェは一人の少女だ。

完全無欠な存在をイメージしていたが、そんなことはない。それを知る。

湯船に浸かり、身体の疲れを取り払う。……ここにカフェも入ったのか。そう思うと何だか落ち着かなくて、さつさと上がる。風呂から上がるとそこには一枚のバスタオルと……バスローブがあった。見てみれば先程脱いだ服は皆洗濯機の中でぐるぐると回っている。

やられた。

「お風呂、ありがとう」

バスローブ姿でそんなことを言う。カフェもバスローブに着替えていて、テーブルでまたコーヒーを飲んでいた。

※

「ああ、トレーナーさん。こちらへ」

とんとん。カフェが自分の膝を叩く。疲れた頭は意図も読めず、ふらふらと言うがままに。

すとんと頭を優しくおろされる。彼女の膝から上半身に目を向けると、カフェは耳掻きを手にしていた。ロブの隙間から見える鎖骨が艶かしい。：いや、そもそも。今俺が寝かされている脚には根元まで何も…。

そこまで気づいた頃にはもう遅い。身体をうまく抑え込まれ、力が入らない。

「じっとしててくださいね」

そうして。

耳の中をゆつくりと、じつくりと。寝かしつけられているような体勢は、自然と心を安らげる。

「今日は、お礼がしたかったです」

かり、かり。少しずつ掻きながら、彼女は語る。

「私には、表現の仕方がわかりません。物語に出てくる人々は、言葉で全てを解決できるのに」

「でも、どうしても。今日の勝利は二人のものだから。トレーナーさんが、私を連れて行ってくれたから。だから、お祝いされるべきは私だけではない」

熱い息が当たる。彼女の顔は見えないが、今までで一番近づいている気がする。

「それで、わざわざ家に誘ってくれた。……ありがとう」

「……ふふ」

しばらくの間、言葉が途切れる。薄い布を互いに一枚纏い、それだけの境目を以って関わり合う。耳掻きの擦れる音と、布の擦れる音。二つだけが響く静かな空間。

「では、こちらを向いてください。反対側も耳掻きしますから」

ぐるりと、彼女の身体側に顔を向ける。なんとなく身体が熱くなってくるのは気のせいではない。彼女の身体が熱くなっているのも気のせいではないだろう。肌と肌の密着が、少しの布で仕切られている。それを取り払って仕舞えば。

「いいんです」

「……カフエ」

「……トレーナーさんなら、いいです、よ？」

それが、彼女の言うお礼だとすれば、それを受け取らないのは、シツレイナノカモシレナイ。けれど。

「駄目だ」

これは彼女の否定ではない。

「まだ、俺の役目は終わっていない」

「だから、カフェ。まだ君は走れるよ。有馬がある。その先にはシニアと、URAファイナルズがある。どちらも大きなレースがたくさんだ。俺はそこへ、君を連れて行く」

「……トレーナー、さん」

「だから。俺を繋ぎ止めようとしなくていい。俺は君のそばにいるよ」

今までの俺の、否定だ。

※

ずっとあった違和感。俺はカフェの足手まといだと思っていた。けれど、カフェからすれば逆だった。俺と離れたくなくて、怖くて。不安ではち切れそうだった。

ぼたり、ぼたり。熱い雫が、俺の頬に落ちる。

「……しばらく、こっちを見ないでくれますか」

「……ああ」

穏やかに、互いの熱が解けていく。

※

「こちらが来客者用のベッドです」

「すごいな、俺の家のやつのは倍はある」

「そしてこれが、ダブルベッド」

「……なんのために？」

「広々と寝るためですが、今日は違います」

「こともなげにカフェは言う。」

「一人で寝るのは、嫌ですよ？」

「そう言うって、彼女は少し悪戯っぽい笑みを浮かべた。」

朝が来るまで手を繋いで、目覚めた時には抱きつかれていた。彼女は存外甘えん坊なのかもしれない。今日から有馬記念に向けてのトレーニング。

立ち向かう敵は強大だが、今度こそ大丈夫だ。再び繋がりあえたような感覚。ひとつ、ひとつずつ。心の糸を結べた気がした。二人で一人、二人三脚で。そうありたい。

失楽園の漆黒は、光に照らされる。

Interlude:Roommate.

「カフェさん！久しぶりだあ〜！」

「……そうでしょうか？」

別荘での宿泊を終えて、寮に帰るなり出迎えてくれたのはユキノビジンさん。私と同室のウマ娘だ。

「そうですね！だってカフェさんいつつどこかに出掛けてますし……いいなあ、シチーガール……」

目の前の彼女は本気で私を羨ましそうな目で見つめてくる。少し罪悪感が生まれる。

「ユキノさんには寂しい思いをさせてしまいましたね」

「カフェさん……。そんだ！お詫び？というか、これから仲良くなるために！」

そう言って、ユキノさんはスマホを取り出し。

「待ち受け！一緒のやつにしませんか！？二人の写真に！」

「なるほど」

それはいい案だ、とあって、私も鞆からスマホを取り出す。一個、二個、三個……。

「カフェさん、そんなに沢山持つてるんですか……？あれま〜……」

「分けておいた方が、便利ですから。……さて、どれから撮りますか？全部の待ち受け、用意しなければな

Scene 04:Conquering, and to conquer.

りませんよね？」

「……う、うん！がんばっぺ！シチーさんよろしくの撮影会！」

その日。マンハッタンカフェの待つスマートフォンの特受画面は、全てユキノビジンのツーショットに塗り替えられた。……ある一つを、除いて。

Scene05: I never want to ending.

心臓から血が流れている。気分はそれなり、レース前にコーヒーを一杯嗜む。血とコーヒーが混ざり合い、私は黒と紅に染まる。身体の内液体が煮えたぎる。

走れるから私たちは走る。勝ちたいから私たちは走る。走ること、勝つこと。それがウマ娘の本能だから。はるか昔にどこかで聞いたその言葉の意味が、今ならわかる。

そして。私はこの瞬間も、走り続けている最中だ。まだ届かない、楽園へ向かって。

君と私の理想郷へ向かって。

今日のレースは有馬記念。おそらく最も有名なレースであり、世代を超えた猛者が集う。私が今からやらなければならないのは獅子の狩りではなく、王者の首を掻き切る大物喰いだ。

「デイエムオペラオーに、メイショウドトウ、ですか」

※

その戦績はまさに比類なく。彼女達の見る景色がどんなものなのか、興味が湧いた。私は常に追い立てる獵犬であり、追われる者の立場には立てていない。最初に追ったのはアグネスタキオン。……彼女にはまだ、

追いつけていない。

私はまだ走らなければならない。そうでなくては、追いつけない。追い越せない。

部屋を出て、少し外を見て回る。トレーナーさんはまだ来ていないのだろうか。ありえないと思うが、もし君が来ないとしたら。私はどうすればよいのだろうか。この舞台は、君に捧げる舞台なのだから。私は君がいなければ、走れないのだから。

「……おや。そこにいるのはマンハッタンカフェ君じゃないか」

名前を呼ばれ、振り返る。

「あなたは、テイエムオペラオーさん」

「実はボクも君のファンの一人だね。いやなに、君は女優ながら歌唱力も素晴らしい。そのことを純粋に称賛していた。だから、君のトゥインクル・シリーズへの参戦には驚いたよ」

「……そうですか、ありがとうございます」

彼女が見ているのもまた、私を包む情報だけなのだろうか。そう思った。

「でもね」

「……？」

空気が、変わる。

「君を今見て、それまで構築していた勝手なイメージはすぐに崩れ去った。……君は、王の首を狩りかねない逸材だ。その目。闘志。わかるとも。済まなかったね、正直侮っていたかもしれない」

なるほど。

「……こちらこそ、申し訳ありません。その王位は見せかけのものかと勘違いしていました」

「はっはっは！……いいね。そう、人は余りにも現実離れたモノを目の当たりにすると、それを歌劇や戯曲、誇張や幻想だと思いたくなるものさ。」

でも、ボクは違う。世紀末霸王は此処に在る。…そして。君も紛れもなく、本物だ」

瞬間、彼女の眼差しが強くなる。それはまさに、威光と呼ぶに相応しく。

「オペラオーさん、どこですかあ？」

「おっと。ドトウが呼んでいるみたいだ。彼女も強いよ。侮るべきではない…なんてアドバイスは不要かな。では」

そう言って、テイエムオペラオーは去っていった。その風格はまさに老王。全盛期を過ぎて尚、立ち振る舞いに衰えはない。

「それでも。私がやることは変わりません」

走れる限り、走る。胸を借りるつもりなどと生半可な覚悟ではない。胸に食らい付き、心臓を食い破る。それが私の楽園への覚悟だ。

「カフェ？どうしたんだ、控え室から出て」

「ああ、トレーナーさん…いえ、少し暇潰しを」

「緊張してるのか？」

「何故」

「いや、落ち着かないから出歩いてたとしたらそうなのかなって。なんてったって有馬だからなあ」

確かに、少し。気分は落ち着いていないかもしれない。昂っていて、滾っている。

「そうかもしれません。……と、いうことで」
がしっ。

思い切り抱きついて、胸に顔を埋める。引けていく腰を掴んで離さない。すーっ、はーっ。

深呼吸をする。君の匂いを身体に取り込み、私の匂いを君に擦り付ける。

「ふう、これで。では、いってきます」

「ああ。いってらっしゃい」

今なら、本当に。楽園に手が届く気がした。

「年末の中山、有馬記念！あなたの夢、私の夢は叶うのか！」

私の夢。あなたの夢。それは私たちにとっては同じものだ。私と君は、同じ夢を見ている。

「ゲートイン完了、各ウマ娘一斉に、」

だから。ここが夢を叶える舞台なら。

「スタートしました！」

夢を束ねている私たちが、負けるわけがない。

割れんばかりの大歓声。彼らは誰に夢を託しているのか。先行している二対の王が、やはり今年の本命。テイエムオペラオーとメイシヨウドトウ。私を呼ぶ声は決して一番大きくはない。

中団から全体を見渡す。蹄鉄の音が鳴り響く空間。残りは遠くの歓声と、己の息の音だけ。それはここに走る全てのウマ娘にとって平等で、だから私には王座へ喰らいつく資格がある。

幾千の風を切り、集団が徐々に速度を増していく。一人、また一人。一度抜き去った相手には二度と抜かれるつもりはない。だから私の走りは獲物を捕らえるが如く。

「最終コーナーを抜けて、テイエムオペラオー徐々に進出！」

これなら、

「……ふーっ……」

いける！

だん、と思いきり切り地面を踏む。抜く、抜く、喰らう、塵殺する。速度の先にある、退屈を射抜いてくれる刺激。

その快感に嘔ってしまう。そう、誰が相手だろうと。私の走りには何の関係もない。皆平等に狩るのみ。

「マンハッタンカフェが外から一気に突っ込んでくる！追い続ける子たちは届かない！」

「マンハッタンカフェ、ゴール！」着はマンハッタンカフェ！年末のグランプリを制しました！」

君がいれば、私はどこまででも走れる。

※

「おめでどう、カフェ君」

「ありがとうございます、オペラオーさん」

「はーっはっはっ！まさに完敗！いよいよ我が御世も終幕ということかな、ドトウよ」

「ええっ、私ですかあ！？……えっと、とりあえずおめでどうございます、マンハッタンカフェさん」

「はじめまして、メイショウドトウさん」

メイショウドトウは自信なさげなウマ娘だったが、その走りは本物だった。

私は強敵たちに打ち勝ったのだと今になって実感する。

「実はね、ボクたちはこのレースを以て引退することにしたよ」

「……それは」

引退。アグネスタキオンのことが頭をよぎる。

「……うん。これからは君たちの時代だ。君は新時代の幕開けを告げるウマ娘となるだろう」

「どうして、ですか」

まだ、走れるはずなのに。走り続けるのがウマ娘だ。私たちは永遠であるはずだ。

「……ボクは強かった。けれど、それは永遠じゃないからさ。それに今日、勝つことはできなかったけど」

一拍置いて、テイエムオペラオーは続ける。

「確かに、走り続けたことへの答えを見たからね。……それ以上は、幕引きを誤る行為だよ」

「私もオペラオーさんと一緒に引退します。私はオペラオーさんのライバルですから。同じ時間を過ごしたい」「お疲れ様でした。そういう他ないのでしょうかね」

答え。私には答えが見つかっていないけれど。答えが、楽園が見つければ。私も走る理由を完結させるしかないのだろうか。

ライバル。私にはライバルがない。私は孤独に戦い続けるのだろうか。……もう永遠に勝てない一人のウマ娘が、頭を掠める。

楽園に一番近い位置まで来た私は、もうすぐ終わりなのだろうか。永遠は退屈だ。

「……ただ、今の私はこの時間に終わってほしくない。」

「おめでとー！カフエー！」

トレーナーさんが自分のことのように私の勝利を喜んでくれる。トレーナーさんの方から抱きついてくる

のを、逃さず捕らえる。私と君が一緒にいて、とても幸せだけど。この関係は楽園への契約だ。ならば。私が辿り着いて仕舞えば、終わる関係なのだろうか。

それなら、私は。

連れて行って欲しくなんか、ない。

失楽園の漆黒は、光の陰にある闇を望んで。

※

「生放送お疲れ様でした〜」

「お疲れ様でした」

今日は一月一日。新年の特別番組のゲストとして、久しぶりに女優としてテレビに出た。

「……あれ、マンハッタンカフェさん？その格好で帰るんですか？」

「ええ、これは私物ですし。問題はないと思いますよ」

「流石に振袖は目立つどころじゃないと思いますよ……？　なんの撮影かと勘違いされますって！」

それぐらいでなくては困る。君の目を釘付けにしてやらなければならない。

「問題ないですね。では、お疲れ様でした」

そう言って、私は街へと繰り出した。

※

「ふう、まだカフェは来ていないかな」

俺は担当ウマ娘であるマンハッタンカフェと神社で待ち合わせをしていた。今年からシニア

級。それに向けて、初詣で願掛けをするのだ。

「それにしてもすごい人だ」

神社の入り口にはものすごい人だかりができています。今からあそこに入り込まなければならぬのかと思うと、すこしぐったりしてしまいそうだ。とはいえ、それでも掛けたい願いがあるからこそ皆ここに来るのだろう。

俺たちも同じだ。彼女の走りを更に研ぎ澄ませるためここに来ている。

目の前の人混みが割れ始める。中から誰か出てくるようだ。…こちらへ向かって？

「……はい、失礼します。……ありがとうございます、また今度」

分たれた人混みは一人の少女によって先導されているように見えた。集団を纏う彼女は華々しい晴れ着を着ていて、その雰囲気はどこか女王のようですらあった。

※

「……カフェ？」

「遅くなりました。少し人混みに捕まってしまつて。」

…あけましておめでとうございます、トレーナーさん」

黒く咲き誇る一輪の花は、艶やかに。芸術品のような姿が、そこに立っていた。

「……あけましておめでとう、カフェ。…すごいな。すごく…その、綺麗だ」

彼女の口元は綻ぶことを惜しまない。周りの目は俺たちに集中していたけれど、見られていようが関係ない。俺の目には彼女しか入らない。

「ありがとうございます。……ふふ、では」

すっと、彼女は俺の手を取る。白い指が、黒い花に差す光の筋のようで。

「いきましよう、トレーナーさん？」

また一つ、歳を経て。彼女は更に美しくなった。

※

こつん、こつん。どくん、どくん。どれほど周りに人の声がしようと、私には己の足音と心臓の音しかわからない。それほどまでに胸は高鳴る。君に触れている限り、私は無敵だ。何が相手でも負けることはないだろう。

「さて、参拝をしましょうか」

「カフェ、恥ずかしくないのか……？よく考えたらこんな人が多いところで変装もせず……」

「いいんですよ」

誰も見ている。その何が問題なのか。君だって見ているのだから、私は幸せだ。

私たちが歩を進めると自然と人は避けていき、あつという間に賽銭箱の前までたどり着く。小銭を入れ、願い事をする。願いは、そう、私の願いは。

楽園へ行くこと。そう思考すると、邪な何かが混ざり来る。お前はそれでいいのかと。何があっても永遠に、

楽園に辿り着きたくはないのではないかと。

辿り着かなければ、ずっと一緒にいられる。

ちらりと横を盗み見る。トレーナーさんは目を閉じ、真摯に何かを願っていた。私とは正反対で、私たちの心は離れてしまうのかと不安になる。

君の手を握る力が強くなる。今の私が、迷いなく願えるとすれば。

「……よし。カフェは何をお願いしたんだ？」

「……トレーナーさんと、一緒です」

「俺が何を願ったかわかるのか？」

わからない。けど。

「トレーナーさんの願いが叶いますように。これが、私の願いです」

それだけは、変わらない。

「……ありがとう」

返答の代わりに、更に君の手に指を絡める。

初詣を終えトレセン学園へ向かうと、道すがらアグネスタキオンと出会った。彼女も俺たちと同じく初詣に行くらしい。

「意外だと思ったかい？たまには私も神に祈るさ。人事を尽くして天命を待つ。それしかやりようはないからね」

彼女にも何か考えることがあるのだろうか。あるいは再び走り出すための。

「それにしてもカフェ……キミはどうしてそんな格好をしているんだい？勝負服より目立つぞそれは」

「目立つのには慣れていますから」

「まあ、余りトレーナー君を困らせないようにするんだよ……。やれやれ、君も大変だねえ」

「心配には及ばないよ」

俺は彼女を楽園に連れて行く礎となるのだ。彼女の全てを肯定してみせよう。

「破れ鍋に綴じ蓋……いや私も人のことは言えないかな？……なんてね」

ひらひらと手を振って、アグネスタキオンは去って行く。その姿を見て、予感するものがあつた。彼女は、まだ、走ることを諦めてはいない。カフェのサポートをこれまで行ってきたのも、自分自身へフィードバックするためであつたのだとしたら。

「カフェ。今年は大変かもしれないぞ」

「大変、とは」

「ライバルだよ。きつと、現れるよ」

でも、彼女は負けない。そのために俺はいる。まだ燃えることができる。まだ焼けることができる。だから、彼女は飛び立てる。

※

不屈であることは罪ではない。立ちほだかることは罪ではない。阻むことは罪ではない。罪を重ねていくのは、それに負けた己の方である。華やいだ気分は徐々に戦慄し、私はまだ飢えねばならない立場になる。それでも私は走らねばならない。

楽園へと征くため？君と一緒に居続けるため？どちらなのか、答えは出ない。ただ君を信じるしかない。私の意識は消え入りそうで、君が動くから私は動く。追い立てられるように、誘われるように。

前へ進むことが正解なのかすら、分からなかった。
失楽園の漆黒は、闇を喰み影を尊ぶ。

Interlude:Accident.

「む」

ある日のこと。トレーナー室にやってきたカフェは少しご機嫌斜めのようだった。

「どうしたんだ？」

「いえ、メールが五月蠅くて。知っていますか？——、という方なのですが」

その名前を聞いて驚く。

「知ってるも何も、最近売り出し中の人気俳優じゃないか。その人がどうしたんだ？」

「社交辞令だと思って連絡先を伝えたのですが。何度も何度も暇な日を聞いてきます。この方は暇なのでしょうか？」

ああ、それは。芸能界ともなればそういうこともあるだろう。カフェはピンときていないのだろうか。

「多分あれだ。口説こうとしてるんだよ。俺も男だからわかるぞ、カフェは美人だからな」

「……私をですか」

その表情はなんだか感情が入り混じっていて、少し奇妙に歪んでいた。

「そうそう、まあ人付き合いだからな。断るにしても穏便に……」

「興味はない、さようなら、と」
遅かった。

「ちよつとカフェ、それは流石に身も蓋もなさすぎないか…？」

「もう送信してしまいましたし。それに」

少し向き直って。

「私にはトレーナーさんがいるじゃないですか」

「それは少し語弊があるような」

「私が美人だと、俺も男だからわかる。言いましたよね」

「まあ」

「言いましたよね？」

今日のカフェは先程までのメールで苛立っているのだろうか。語気が強い。

「そうだな…：もちろんだ。でも俺は君のトレーナーだ。だから、男である以前にわかることがあるぞ。君の魅力はそんなもんじゃないとも。君のひたむきさ、ストイックさ。俺は知ってる。それに意外と寂しがり屋だ。そこだって可愛い、素敵なところだと思う。だから、」

誰かいい人が見つかるといいな、と言う前に。

幾度目かの古傷に噛み跡をつけられ、言葉は遮られた。

Scene06:Golden Dawn is Glorious Dream.

飛び交う世界は安寧の如く。超える輪廻は愛憎の如く也。目が回るといふ感覚は極彩色のモノトーンの中にあっても一厘も存在しないし、雪解けの後にあるのが灼熱の熱帯夜であっても僅かさえ怯まない。それらは全て必然的なホンの話で、頭の中には展開予想図が組み込まれているのだから。是即ち、夢幻に於ける夢現。白い背景に七色の鯨が浮かぶ中、私は「軸を後ろに向かつて駆け出す。数歩の後退りの後光の帯が渦を巻くように立ち並び、物語が幕を開ける。夢と幻の世界。けれどそれは夢と現の鏡なれば。

私は火口に立っている。剥き出しの岩肌と同化して、仄暗いマグマの流れを演じる。ここが私の過去の世界。私のいる場所の後ろにあったもの。一つずつ、目の前の風景を具体化する。夢の中にいる時に正しく歩くためには、いかに自分自身の目を覚まさずに焦点をリアライズできるかが重要なのだ。

そう、私が今見ているものは夢だ。これは退屈な日常においても忘れ去られるほどの価値しかないミリ単位の塵芥だ。

そこに目を向けるならねじ曲がった根性を持たねばなるまい。夢に価値を見出すことは相当に難しいのだ。

さて、気がつけば。私がいる場所は一つの公園になっていた。そこでは仲睦まじい親子が遊んでいて、その姿に私は大いに見覚えがある。あれは私と母親だ。母親の姿に憧れて、私は彼女のようになりたくいと願っ

たのだった。

そこまで思考をはっきりさせて来ても、私の目が覚める様子はない。深く眠りについていて自分自身に感謝しながら、更なる舞台を紡ぎ出す。ここに於ける私の姿を現像する。夢というのは一人称で自身のモデリングを必要としないのだが、思ったよりも理屈を通すことを要求するのだ。

私は確か……そう、あそこにいる幼い私とその母親の見た目を混ぜ込めばいい。確か私は母親似だと言われていた気がするから。そうして臃げな靄でできた指先から、一つずつヒトガタを作り出す。頭部を創り出すのに合わせて、脳の中をカリカチュアライズする。私はこういうキャラクターだというふうに……なんだかこういう作業は得意だった気がする。そうだ。

私の職業は女優だったっけ。

そうしてこの世界に降り立つ私は、確か未来に繋がる助言をするために過去の私に会いに来た。その資格がある。身体がほのかに暖かく、恐らくこれは布団に入っている我が身の熱であろうと推測する。まだ私は深く眠りについていて。ならば一言ぐらい寝言を喋らせても大丈夫だろう。

夢の中で私が声を発することは、脳が喉に対して発声を命ずることに等しい。命ずるだけでそれが実行されるとは限らないが、実行されればそれは喉の渴きを生み目覚めにつながってしまう。つまりどうということかという、私は限られた回数の会話で夢の中を満喫しなければいけないということ。目覚めるまでの何度かの口数が、夢を動かし現実に作用するのだ。

ゆっくりと、

公園で遊ぶ二人に立ち寄る。その歩みはしっかりとした足の動きを伴っていたのか、夢の中らしく空中浮遊していたのか。こういった点を覚えておくことが後に夢を思い出す時にそれをより明瞭にしてくれる。近づくにつれ母親の姿は見えなくなり、幼い私自身がはつきりとしてくる。

あなたに伝えられることはなんだろうか。未来にどんな影響を及ぼせば素晴らしいだろうか。考えてはみるが、何しろ半分以上寝ながらの思考だ。その終着は堂々巡りにすら至らず、第二コーナーあたりで頭はずでにバテて走れなくなってしまう。

考えが動くたびに連動して空は歪み、公園の風景は再びマグマ煮えたぎる火口へと跳ぶ。火口にて私と私が二人。物言わぬ私を持ち上げて、炎の中へ突き落としてみる。突き落とす時に何かしらのメッセージを述べてみる。

それは自分には呻き声のようにしか聞こえなかった。要するに私の寝言は支離滅裂どころか言語の体を成さずに終わったということだろう。けれどもなぜか満足感が身体を満たした。

火口から私を釣り上げ、もう一度何かを伝える。これで更に満足する。突き落とす。繰り返すたびに満たされる。納得がいけないのは、満足したはずなのに風景が変わらないこと。夢というのは常に流動するものであるから夢なのであって、留まれば留まるほどその景色が鮮明になりレム睡眠が薄れていってしまうのだ。

…と、そこまで頭を巡って一言。

「あなたは、トレーナーさんにもっと優しくするといい」

これだ。感情の起伏が少なく、女優業でレースをほったらかし。そんな私には、もっと思いやりが必要に決まっている。そう告げると頭が再び柔らかい微睡に包まれる。そんな己の首を引きちぎって火口へと投げ込む。最後に首無し私を見ながら、私の意識はまた「軸」を駆け巡る。

夢。夢。夢に於ける景色の変化は心情の変化そのもので、本当は先ほどまで見ていたものは公園でも火口でもなかったと思う。そういう認識を私に植え付ける空間、以上のものではなかったと思う。それは絵の具を塗りたくったようなものであったり、鉛筆と消しゴムだけで描かれたようなものであったり。

とにかく抽象的だった。夢の中で冷静に見える事象は全て過去の出来事だ。時間軸が存在しないかのように振る舞いながら、思考の変化と一体化した世界は不可逆でしかない。確定した状況のみが思考の跡となつて私の脳に残る。つまり本質的にはリアルタイムの夢を記憶に残すことなど不可能なのだ。記憶した時点でそれは過去の夢となり、変化の跡が跡形もなく残り続けるのだから。

往く先は永劫臨界、美しく燃える未来の事象。私は夢の中にいて、それを見守ることが容易い。

これからやることも単純明快だ。過去に伝えたメッセージが、未来でどう活かしているか。それを確認する。それが私の夢の第二部となる。

未来世界に及ぶ思考は拙く、そこにある風景は先ほどと対して変わらなかった。ビジュアルではなくイメー

ジとして、「この世界は未来のものです」と表層思考に伝わる。だからここは未来だ。さて、未来の私はどうしているだろうか。トレーナーさんと少しは仲良くしているだろうか。いつのまにか期待は高まり、安らかに眠っているはずの心臓が高鳴る幻覚さえ感じる。未来というのはそうでなくてはいけない。

豊かに色付き、幸せでお腹がいっぱいになる。でもわからないのは、私が願う未来というものがどんな形をしているかだ。トレーナーさんと仲良くしていればいいなどとのたまったが、実際それを望んでいるとは到底思えない。

私の心はただただ退屈しのぎを求めるのみで、君の状態がどうであれ構わないと思う。嫌われていたって構わない。何故あんなことを過去の自分に伝えたのか、少し後悔すらしている。端的に言えばどうでもいい。夢の中の思考というのは苛烈な表現を孕みがちだが、これも少し過激すぎるだろうか。

そこまで歩いて、歩いて。あるいはゆらめいて、踊るように。未来世界の地図を片手に、未来の私を探し求める。未来の空は相も変わらず七色の鯨が泳いでいたし、意外と元いた現代と大差ないと感じる。ここが何年先の未来なのかもわからない。老いさらばえた私と出会うのかもしれない。夢の中に明確な時間軸はないというのに、そんな無意味な思考を止めることはない。夢の時間は伸縮自在。

先ほども言ったが、過ぎ去ったという事実だけが夢の中には存在する。同じように自らの思考を流れさせることがこの小さな脳内空間で私の存在を担保しているのだ。

「いた」

そこに見た人の形状がどうであれ、私が認定すればそれは私の未来になる。未来に手が届くのは夢の中の特権で、奇想天外ではあれど予想外となることは絶対であり得ない。夢の世界は確かな幸せが保障されている。

だから、私が見たその幸せが。私が求める未来の私なのだ。彼女はとてもにこやかで、幸せにしている。彼女は顔のない人に寄り添って、幸せにしている。彼女は日々を楽しんで、幸せにしている。そこに私の助言は意味を成していたのか、そもそも私の頭に助言の内容が残っていたのか、それはさっぱりわからないけれど。

夢は連続性を綿布程度にしか持たないものだから、それでいい。ああ、私は幸せそうにしている。难道かそのことがとても切なくて、愛しくて。声をかけることもなく、私は再び満ち足りる。満ち足りた瞬間に夢の景色は砂のように溶けていき、ばたん、ばたんときき割りの背景が立ち変わっていく。今までの過去と未来は全て空想夢想。それを認識し、また一步を踏み出す。

こうして私は、目を覚ました。

目を覚ました私は現実の素晴らしさに感謝する。だって素晴らしい現実が、こんな素敵な夢を見せてくれたのだから。身体に帯びた熱はさらにほかほかとしてきて、幸せでいっぱいだ。幸せな夢を見た、幸せな夢を見た。

そう大声で吹聴しながら外を歩き回り、やがてトレーナーさんのところへたどり着く。身振り手振りを交えて、決して忘れられない夢の話之余す所なく語る。見終わった夢はもう戻ってこない。

だから私は夢を追悼する目的で語り継ごうとするし、夢を語れる現実に戻ってくることは夢との別れを意味している。

僅かに涙が流れる。それは感動と幸せと、さよならの涙。幸せな体験をくれた夢に感謝して、私は目を覚ました。こうして、目を覚ました。めでたし、めでたし。

とーん。頭の重さを感じる音。びよびよ。外に鳴く小鳥の囀り。上体を起こすための力が全身に入ると、粘ついた空気感覚も身体の周りにまた表れてくる。その感覚だけで、ここがどこか私にはわかる。何が起こったのか一瞬で思いつく。何度目かもわからない、限りなく飽き飽きした退屈な現象。

ああ、私は目を覚ましたのだ。

私がいいたのは布団の中で、私は今度こそ本当に目を覚めます。夢の中の思考や感覚というのは全て無価値である。何故か？頭が眠っている状態で感じたそれは寝ぼけた故の判断ミスに過ぎない。もとより夢の空間を形作るのにも脳は使われていて、自分自身でお膳立てした空間で脳なしになった私が幸せになることなど当たり前前に過ぎる。

それまでの感動が一気に無感動に変わるのが、目覚めの時。

それは夢に感謝する瞬間などではない。ああ、結局夢なのか。ああ、あんな夢で喜ぶ私は愚かだった。夢の中で目覚める夢だって何度も見せられた。その度に私は幸せいっばいの現実にくか喜びし、真に目覚めた時に現実と夢は如何に差があるか、肢体の感覚から毎回のように教え込まれる。腕は重く、上体は重力を感じる。宙を浮ける錯覚など万に一つもあり得ない。そして何より、全てが退屈だ。

夢の中で見る偽りの現実と本当の現実のリアリティスケールはあまりに遠く、稚拙な夢に心躍らされた自分のため息をつくしかない。そういう瞬間。

そして退屈な現実における塵芥でしかない夢を必死にかき集めようとする。こんなにも素晴らしい感覚を失いたくないともがく。けれどそれは大抵無駄に終わる。例えば今回は、私の過去を名乗った夢の姿。それは偽りだ。

私の母親との記憶などほとんど存在しないし、私が女優を志したのは単に物語への憧れからだ。母親の顔すら知らないのに、よく母親のようにになりたいなどと夢にみたものだな。自分で自分を嘲りこき下ろす。その過去は私の愚かな願望でしかない。

未来はどうだろうか。これこそ滑稽だ。願望に更に妄想を重ね、空想夢想は幻想に墜つ。ユメマボロシの極致である。私は取るに足りない幸せなど一度も望んだことがない。永遠に笑っているだけの幸福など退屈で仕方がない。変化のない日々を楽しんだことなどあるはずがない。

：顔のない誰かに満足することなど、考えたくもない。私にとって君は、どうでもいいわけが。

私が幸せならそれでいいなどというのは、まさに己の思考を半分以上閉ざしたが故の愚かな結論に相違ない。酷く、酷く。乾いた笑みすら浮かばない。

最後に見た夢。目を覚まして現実に感謝するという、夢。現実は得難く価値あるものだという、夢。それがユメマボロシに過ぎない。本物の現実はどういったものか。どこへ行っても纏わりつき、疲労感だけを溜め込むもの。それ以上ではない。息をするのに頭を使い、脚を動かすのに頭を使う。

それは生きながら罰を受けているかのようで、罰の代わり映えのなさこそが私を真に苦しめる。ああ、どうして現実は退屈で苦痛に塗れているのだろうか。夢というものはどうして憧れる世界を見せてくれず、空虚で突拍子もない雑多な幸せだけを塗りたくるのだろうか。

どうして、嘘でもいいから幸せを持続させてくれないのだろうか。起き上がった瞬間にそれはか細い過去の夢になり、ユメウツツにある間の僅かな時間だけが私にとっての夢の価値である。

現実の色褪せていて、退屈だ。

鳴り響く複数の携帯電話を順に処理する。マネージャーからの電話は、おはようの挨拶と今日のスケジュールを確認する。そしてトレーナーさんとの電話。夢のように、君に幸せな夢を見たと報告はできない。そのことに少し物悲しさを覚えるけれど、表には出さない。こちらも挨拶とトレーニング内容を確認する。服装を整え家を出る。私が女優をやっているというのは、夢の中の出来事ではない。とはいえ私は女優として、物語を映し出す鏡のようなあり方を選択している。これはつまり私自身には大した価値がないということでもあって、私に映る誰かの姿に人は魅力を感じているだけなのだ。

「おはようございます、マンハッタンカフェさん」

「……おはようございます」

控室に向かつて。複数の同じような挨拶の一つずつ同じ言葉を返す。これがユメノウツツだったら、私は大喜びで夢の素晴らしさを叫んでいたはずだ。やはり夢というのはどれだけ現実を装っても現実味がないと思ひ知る。今日は我ながら夢の内容を引きずっている気がする。まあ退屈しのぎの思考迷宮はいつものことなので、取るに足りないそれを放置する。

退屈。

私にとっての退屈とは、人の生きる命のこと。私たちは十全に保護された社会に住み、枠から外れないた

めに生きている。そこには安全がある代わりに他に何も無い。

命を燃やすような輝きの世界は物語の中に潜んでいて、現実には私たちに映し出すには私たちのような鏡となる演者が必要とする。……少し前まではそうだった認識だったし、今も人生の退屈さは変わっていない。けれど一つ差異がある。だから、私は今も歩んでいる。

今日の出演はバラエティ番組だった。もうすぐあるレースのことについて聞かれた。何も話題が無かったらさつきから堂々巡りを続けている夢の話でもするかと思っただが、やはりそれはこういう場には相応しくない。レースの話は私にとっても価値ある話だし。

レースというものがある。私たちウマ娘が走る場所で、人はそこに夢と希望を垣間見る……らしい。そしてウマ娘は本能として、走ることを尊ぶ。勝ちたいと願う。私がこの世界に脚を踏み入れたのは最近のことだ。そこには血に飢えた私の渴きを癒す戦場があった。差し切った時の興奮は何物にも変えがたい。……そういうトークは求められていないと以前マネージャーに怒られたので、控えるようにしているが。でも、でも。なによりも、なによりも。私にとつての走る理由は、退屈を忘れられる理由は。

「ああ、トレーナーさん。今向かっています。……今日の撮影はどうだったかって？ふふ、今日はトークの出演ですよ」

トレーナーさんが。君がいるから。

私がトレーナーさんに会ったのは、たまたま。けれどそれが運命というものかもしれない。マネージャーの指図でレース界にデビューすることになった私は、誰でもいいからとトレーナーを探していた。けれど誰もが私を見ていなかった。

正確には、私が被っている有名女優の黒毛ウマ娘というヴェールばかりを見ていた。そんなのは今までと変わらなかった。別の世界へ行きたいのに、私は見飽きた世界にまた飛び込むのか。女優業を蔑ろにするつもりはない。

むしろ広告塔のように雑に扱ってほしくないからこそ、私は勧誘を断っていた。

そんな時、私はひとつ問いたくなった。

「あなたは私を連れて行ってくれるの？」

そこまで明確に言語化はできていなかったし、我ながら今でも不明瞭な問いだ。だから結局持ち出すことは一度もなかったのだけだ。

それに対する答えと出会ったのが、君との出会いだった。

ただ一人、女優のヴェールを脱いだ私に話しかけてきた。独りぼっちで奏する私に。マンハッタンカフェというウマ娘に。その時、おそらく私はこう問うた。

「ねえ、早く連れて行って」

どこかに、あなたが。君が、連れて行って。その時はそもそもトレーナーさんがトレーナーだということも知らなかったけど。何もかもが曖昧模糊で、答えるに値しない問いだと思う。でも、君はこう答えた。

「わかった。俺が、君を連れて行くよ」

その行く末がどこかにあるとしたら、夢物語の樂園かもしれない。荒唐無稽で存在しない場所に向かう。そのようなあてもない旅というのは自殺行為に等しい。けれど、私はその手を取る。方角だけしかわかっていない、定まっていない目的地へと向かう。だって、君は。私を連れて行ってくれると言ったのだから。

「……お疲れ様です、トレーナーさん」

「そちらこそお疲れ様、カフェ」

すでに夕暮れを過ぎていた。トレーナーさんの顔を見て、少しだけ思う。現実も悪くない。君は間違はなく、こちらにしかないのだから。

「そうだ、トレーナーさん……ちょっとこちらへ」

「ん？どうしたカフェ」

無警戒に寄ってきたトレーナーさんに覆い被さるように抱きつく。首筋にある何度目かの噛み跡の瘡蓋を舌で剥がしながら、また温かい血が出るまで齧り付く。うん、やはり悪くない。

「今日、夢を見たんです。それで思いました」

「こんな夢を見せてくれる現実は、悪くない」

素晴らしいとまでは口走れなかつたけれど。その日確かに私は夢を糧にした。夢と現実の差は、時折現実の得難さを教えてくれる。夢の中で得たその結論に回帰する。夢はやはり退屈かもしれないけれど、それは一人の独創に過ぎないから。君と一緒に見る楽園の夢なら、きっと退屈しないのだ。ユメマボロシはウツツと変わる。それが、楽園への原点。

Interlude:Fassion.

「そういえば、カフェはどれくらいの数服を持っているんだ？」

「…服、ですか？」

「ああいや、女優はやっぱりたくさん持ってるのかなって、なんとなく」

そう聞くと、彼女は少し笑みを浮かべて。

「…見に、来ますか？」

乗り気にさせたからには、断るわけにはいかない。

※

「…服はだいたい部屋一個に収まる程度です。ドラマで着る衣装は借り物ですし、私自身が持っているのはこれくらいで。大した数ではありませんね…ですが」

十分多いと思っただが、カフェは言葉が続ける。

「服装には理由があります。別の服を着れば別人になるというのは比喩ではありません。私たちは服と共に、

そう言って、一つ服を手取る。

「例えばこの服。愛らしい少女が着るべきもので、普段の私には合いません」
確かにその明るい色は、彼女のイメージとは違っている。

「でも」

その服を手前に持って、彼女がぐるりと一回転する。顔を伏せ、また持ち上げる。
起き上がった顔に浮かんでいたのは、満面の笑み。不意を突かれてどきりとしてしまう。

「……と、このように。服を変えれば気分は変わり、人は変わります。……今のは変えすぎですが」
「さすがだな」

「私はただの鏡。普段が無色で無感情故に、これを天職としているだけです」

「……うーん、そうかなあ。カフェは結構感情あると思うけどな。……ほら、今ちよつと笑った」
かぶり。返答の代わりに、首元に甘い痺れが走る。

「……んっ。もう。そんなことを言ってくれるのは、トレーナーさんだけですわね」

Scene07: Fate to Fatally.

「はい、トレーナーさん。バレンタインですから」

そう言ってマンハッタンカフェが手渡したのは、銀紙に包まれた市販の板チョコ。任務完了と言わんばかりに、渡した後はコーヒークップに手を戻す。

「ありがとう」

彼女の多忙を考えれば、わざわざ俺の分まで買ってくれただけでもありがたいというものだ。大切にいただこう。そう思っ懐にしまおうとしたのだが。

「おやおや、トレーナーさん。それでは溶けてしまいます。すぐに召し上がってください、ね？」

「それなら仕方ないな」

目の前で食べて欲しいということかも知れない。少し特別な存在になった気分だ。きっと彼女は大量の義理チョコを顔も知らない相手に渡す立場にあつて、その中の一人から抜け出せるのは嬉しい。

※

そうして、チョコレートを口にす——硬い。それに。

「……これ、全然甘くないというか、苦い……!」

「カカオ90%のチョコレートです。お気に召しましたか?」

まさか吐き出すわけにもいかず、一生懸命に一口飲みこんだかけらを噛み締める。

苦味だけしかない後味が強烈に残る。漸くかけらを飲み込んだが、破片はまだ口の中でその香りを充満させていた。

「少し苦かったかも知れませんが……今ミルクを用意しますから」

「……ああ、頼む」

彼女は顔色ひとつ変えずにコーヒーを飲み続けていた。立ち上がり、コーヒーミルクを取り出す。……コーヒーミルク?

「はい、口を開けて」

「それしかないのか」

「口を開けて」

従うしかない。だらしな性格で口を開け、垂らされるコーヒーミルクを受け止めようとする。声は出せない。ただ言いなりになる。口を閉じることすら許されず、渴きが喉へとやってくる。

ここまで凡そ計画通り。君はもう私の口の中にいる。あとは、白と黒を溶け合わせよう。

「はむっ……………」

君の唇を思い切り食う。舌を絡めて口内に通路を開き、思わず逃げる腰へがっしりと手を添える。

口の中を満たしていたブラックコーヒーを君の中へと流し込み、舌を使ってミルクとコーヒーを混ぜ合わせる。

蹂躪の始まりだ。

※

「……………んっ……………んっ……………ちゅっ……………」

逃げる君の舌を捕らえ、舐め回してはまた逃す。口の中に広がる黒い海。そこを二人きりで泳ぐ艶かしいピンクの肉塊。空気すら邪魔できない最高のプライベートビーチだ。

「んっ……………うむ……………えお……………」

ただ、全てを食う。既に数分が経っていて、君の必死な鼻息が顔に当たる。そのまま窒息してしまうのだろうか。そうだとしたら、とても素敵だ。

だってそれなら。君が最期に見るもの、最期に味わったものが私であるということになるのだから。

「ちゅぷ……ちゅぷ……」

びたり、びちゃり。上顎の裏をつーと舌でなぞる。形を覚えるまで、何度も、何度も。混ざり合った粘膜と液体が、甘く蕩けるよう。君の膝がガクガクと震え出す。気持ちよくなってくれているのだろうか？それならもっと。更に。

優しく地面に腰を下ろしてやる。君は未だに舌で抵抗しようとしているけど、それがくすぐったくていじらしくて、ますます興奮してしまう。すっと腕を抱きしめて、脚を絡めて。君はもう口しか動かさせないし、口もただ気持ちよくなることにしか使えない。

「あむ……はっ……ちゅるっ……」

コーヒーを飲み込みそうになる君の口から吸い出し、再び送り出す。これは二人で作った大切なカフェオレ。白と黒が混ざり合うことを証明してくれるもの。そう簡単に飲み干してはいけない。君の舌を何度も捕らえ、愛おしむ。

それを繰り返して漸く、君の方からも舌が伸びてくる。求める。求め合う。どんなチョコレートより、君が美味しい。

片時も離さない。歯茎の隅まで互いに貪り、その度に粘膜が絡み合う。淫靡な音がただ、ただ。誰も邪魔できない黒の庭。果たしてどれほどの時間が過ぎたのか見当もつかない。どれほど重ね続けても飽きることはない。永遠でないとしたら、せめて那由多に続いてほしい。

少し角度を変えて、君の喉の奥まで舌を伸ばす。君の身体が少し、跳ねる。味わえる限り、君を味わいたい。

だから、限界まで。色のない私を、君に染めて欲しいのだ。

「んっ……む……あう……」

漸く私も息切れしてきた。まだ終わりたくないけど、これ以上は君に嫌われてしまうかも知れない。そんなことを考えて、舌を引いて。唇を離そうとした時だった。

「……むっ……んんっ……！……れろっ……」

君の腕が私の後ろに伸びてくる。君の舌が名残惜しむかのように口の中を這いずる。私たちは抱きあう形になって、まるで本当に愛し合う二人になったかのようなようだった。

たちまち力が抜けて、今度は君の蹂躪を一身に受ける。強く強く抱きしめられ、私は答えるように舌を絡める以外に術を持たない。

君の少し渴いた唇が、私の唇に思い切り押しつけられる。唇の重なる感覚が心地いい。限界まで二人の間隔を縮め、ゼロ距離で愛し合う。ああ、幸せだ。

挿し込まれる舌を優しく手招きし、啞内へと誘う。私は君を喰らったのだから、君にも私を堪能する権利があるだろう。歯の裏や隙間まで、私以外の生き物が触れるのは生まれて初めてだ。

口付けという行為には特別な意味がある。今まで物語における知識でしか知らなかったそのことを、己の身体で教えられる。

異物の侵入がこんなに心地いいなんて。求めたものが受け入れられることがこんなにも素敵だなんて。

そのまま静かな水音と共に、溶け合うまで。

※

「……どうでしたか、バレンティンのお味は」

「いや、その。恥ずかしいというか」

完全に彼女に魅了されてしまっていた。後になって自分ほとんどないことをしたのではないかと思いはじめた。でも。

「ありがとう、カフェ」

でも、彼女の誠心誠意がこれだというのなら。距離感は少し近すぎるかも知れないが、そこに悪意はないのだから。

「こちらこそ、ありがとうございます」

少し彼女の頬が染まる。……流石に恥ずかしかったようだ。

思う。彼女はきつと見た目より純粹で、抱く感情も激しく揺れ動く。そんな彼女は普段の生活を仮面を被って乗り切っていて、それを外せる数少ない場所がここなのかも知れない。それなら。俺にできるのは、彼女が深層まで心を開けるようにサポートすること。

どこにいても、誰とでも。たとえ、俺がいなくても。

彼女には彼女にしか見れない景色があるのだから。そこにたどり着いたあと、一人で歩けるように。もしかしたら彼女は望まないのかも知れない。けど、望ましいのはそれだ。

黒は一滴でも濁れば黒ではなくなってしまう。そのためには何も触れないか、強くあり続けるか。俺は彼女が強くなるまで、彼女が澱んだ色に触れないようにする責務がある。そう感じた。

君は俺にとって大切な存在だから。だから、俺に縛られないで欲しい。

失楽園の漆黒は、光射す方へ導かれる。

※

放課後、熱く黒いコーヒーを嗜む。いつもの通りのルーティンだが、今日は二つ違うところがあった。一つはここが生徒会長室であること。そしてもう一つは、目の前で同じくカップに手をつけているトレセン学園生徒会長、シンボリドルフの存在。

「よく来てくれた、マンハッタンカフェ」

「流石に会長さんのお呼び出しとあらば、出向かないわけにはいきませんよ」

「なかなか君を捕まえるのには苦労させられたがな……」

おっと。そういえばトレーナーさんと会っている時は、他の連絡手段は全て電源を切っていたっけ。
「それは申し訳ない」

「いや、こちらこそすまない。忙しい中、感謝する。……さて」

シンボルドルフはカップを置いて、向き直る。此方に向けられるその風格は皇帝と呼ぶに相応しいものだった。気を抜けば喰われるのはこちらの方、そんな気がした。

「今度、君が春の天皇賞に出走すると聞いてね。…まずはそのことについて激励を」

「わざわざ会長さん自らの応援とは、痛み入ります」

「君が挑戦しようとしている記録は、難攻不落の巨大な壁だからね」

「記録？」

「おっと、これは失礼。まずは説明からかな」

少し意外そうな表情をされる。私は走ればそれでいい。君と走ればそれでいい。何か大記録に手が届きそうだななんて思いもしなかった。その記録に届けば、楽園にも手が届くだろうか。届いてしまうだろうか。

「中央におけるG1レースのうち、最も距離の長い三つ……京都3000m、菊花賞。中山2500m、有馬記念。そして京都3200m、天皇賞（春）。これをクラシックからシニアにかけて連闘し、三連覇を成し遂げる」

「……なるほど」

「長距離重賞の最高峰を総なめし、最強のステイヤーとしての功績を打ち立てる。この記録は現在、ただ一人のウマ娘によってしか達成されていない」

「その一人とは」

「私だよ」

「……自慢話ですか」

そう皮肉を突き刺すと、シンボリルドルフはそれを笑って受け止めた。

「ふふつ、そうだな。そう捉えられても仕方ない言い回しだった。：ああ、でも。これが偉業だと言うのなら、達成したことを誇りに思うし、また達成されることを心待ちにしているとも」

「貴女の後に続いて欲しい。それが今回の話の肝ですか？もしそれだけなら、大した話ではなかったですね」

私が誰のために走るか、何のために走るか、なんて。それは変わらさず、決まり切っている。

「……いや、もう一つ話があつてね。こんな昔話だけで君を退屈させたりはしないよ」

「……ほう」

私を退屈させないと宣言するなんて。面白い。

「もし、もしだ。レースに絶対はない。勝った後の話をするのは愚かしいことだ。そうだとしても、もし。

君が春の天皇賞を獲ったなら」

ゆっくりと、彼女は言葉をつき出す。重く、強く。

「君には、私を超えて欲しい」

その言葉には、僅かに切実さが込められていた。

「超える。七冠バの貴女を？」

「問題なのは強さだよ」

強さ。それは記録では測れないものだろう。

「マンハッタンカフェ。私にも不可能だったことがあるんだ。日本で幾ら勝利を重ねても、終ぞ」

彼女は少し拳を握る。悔しさというものを、無敵の皇帝から初めて感じ取る。

「海外、ですか」

「そう。運や巡り合わせもあっただろう。それでも私は二度、確かに失敗した。遂に最後まであの門を拜む

ことすら叶わなかった。…世界最高峰のレース、凱旋門賞を」

凱旋門賞。私でも聞いたことがある。

「……確か、日本から出走したウマ娘で勝った者はいない」

「そうだ。我々の悲願。尤も私は挑めてすらいないけどね。…今でも偶に、夢に見るよ。おっと、それはともかく。

マンハッタンカフェ。君が天皇賞で勝ったなら、君は紛れもなく世代最強だろう。そして私と同じ道を歩

むことに成功し、更にその先へと行ける」

世代最強。そのフレーズを聞いて僅かに頭を掠めるものがあつた。私はその称号に、本当に相応しいのか。

けれど。

その先にいけるなら。まだ、私たちはゴールに辿り着かない。楽園への道筋が続き、君との時間を重ねら

れる。そうしていられる。

「分かりました。……勿論、勝つてからです」

「応援しているよ。心から」

空気が緩み、今度こそ解れる。けれど心の内の黒は濃く、深く闇を増していく。

※

本当は、凱旋門賞にそれほど興味があるわけではない。けれどそこには、まだ誰にも到達できていない何かがあるという。それならば、私たちが向かうべき楽園に近い。前代未聞、荒唐無稽。果てなく空に浮かぶは天の庭。私たちは楽園に向かう。その道筋はまだ終わらない。

私の願い。君との楽園。海の先にそれがあるというのなら、千里を越えてみせようじゃないか。ねえ、早く連れて行って。

失楽園の漆黒は、灼き尽くすような光へと冀望の翼を掲げる。

ただ黒い夜。私はコーヒーを一杯飲み下す。一杯、また一杯。勘違いしないで欲しいのだが、コーヒーを飲んでいるから眠れないのではなく、眠れないからコーヒーを飲んでいる。

今日も蒸し暑い。外は雨が降っていて、せつかくの星も見えはしない。眠れない夜ほど退屈なものはないのに、僅かな星見の楽しみさえ奪われてしまっている。

すこし、少し考えて。私はぼつりと独り言を発する。

「……外を歩いてみましようか」

雨の中を歩むそれは、或いは狂人の歩みに近い。それならば上等だ。何もなくてつまらないなら、芝居の糧にでもしてやればいい。

真黒の傘を刺し、真黒の私は真黒の空へと歩みを進める。木々は影しか見えなくて、黒に塗り潰されているかのように錯覚する。

ぽつ、ぽつ。雨音は少しまばらだったが、決して無視できない程度。傘を持ってきていたのは正解だろう。そうして、夜の道を歩み出す。

私の別荘はトレセン学園とは離れたところにあつて、当然門限などもこちらにはない。最近はずで過ごすことが多かったので夜に出歩くのは久しぶりだ。

いっぶりだったか——逡巡し、思い当たる。

ねえ、早く連れて行って。

あの時。

まだトレーナーになっていないトレーナーさんが来るのを一晚待ったあの日。そうだ、と思い当たる。あれから少し月日は流れた。私たちの関係は順調に堅く強いものになった……とはとても言えない。私の罪。君を愛する傲慢の大罪。

それは時間が経つごとに、根深く太くなっていく。

雨の中、ふと傘を閉じてみる。冷たい水滴はそう、あの日のようで。

あの、二人の契約が始まった日のようで。傘も差さずに抱きついて、どうしようもないくらいに言語化できない感情を溢れさせた。あの日確かに見えたなにかが、私たちを引っ張っているのか、それとも。縛っているのか。

答えはまだ、見つからない。楽園に行かなければ、全ての正答はわからない。私の中には心が二つ。それは一つに混ざりながら分かれていた。

君と共に楽園へ。使命感か、私の本質か。羽ばたく天使の如く、私に翼は生えているのか。それとも。

君と共に奈落の底へ。諦観か、私の願望か。囁く悪魔の如く、私は君を永遠に縛ろうとしているのか。

ここで走るのをやめて仕舞えば。私はきつと、永遠に君と。でも。永遠は退屈で、もしかしたら君にすら飽きてしまうのかもしれない。己の飢えが、君すら無価値と断じてしまうのかもしれない。それも怖い。なにもかも、怖い。

私は、私は。君と離れたくないから走るといふのなら。そこに楽園の実在性は必要なのか？

或いは、君と離れたくないという感情自体に過ちがあるのか？優先すべき信仰は一つのみで、残りの異端は廃するべきか？

私は、私は。

虚数空間に浮かぶ虹を幻視して、私の旅路はひとまず終わった。

血に飢えた獺犬には、己の血すら通っていなかった。信ずる人と心を通わせ、通った心を喰らい燃やして。漸く一人の生きたいのちへと変わっていった。そうでなくては生きていけない、無機質で無感動な無色の少女。

今、迷う。それは彼女の心の存在証明。願いは理想を目指すものか、欲望を目指すものか。失楽園の漆黒は、闇の空に虹光を視る。

Interlude: Window.

今日は雨が降っていて、トレーニングはお流れた。トレーナー室でカフェと二人で雨宿りをしている。彼女はずっと外を見ていて動かない。コーヒーを啜る音と雨音が部屋で混じり合う。

「何を見てるんだ？」

「もちろん、雨ですよ」

振り向かずに彼女は答える。そんなに入ったのだろうか。

「ああ、動かないでください」

「……なんで？」

「なんでもです」

窓の外を見ているのに俺が移動するのがわかったのか。不思議だなど思いつつも、問い詰めるような内容ではない。

「……ふわぁ」

「くすっ」

すっかり気を抜いて欠伸をしていると、カフェが笑うのが聞こえた。そんなに外の雨は面白いのだろうか？

Scene 07:Fate to fataly.

窓に映る君の姿。まるで四角い箱に閉じ込めたようで、すこしぞくぞくする。
普段の君は私の前では油断してくれない。だから、もう少し。雨がずっといいな。

Scene08: Love me do.

夢日記をつけてみようと思う。きっかけは単純で、私が夢を見て飛び起きたというだけ。精神の不安定に繋がるとも聞いたが、上等だ。私は危うい地点に立って、安寧という退屈からはかけ離れていたいことから。寝ぼけ眼は擦らない。普段起きたら必ず行うであろうルーティンは一つも実行しない。何故か？私が夢の内容を覚えているためには、私が寝ていた時の脳を出来るだけ弄ってはいけなからだ。脳が目覚めれば瞬間に記憶の回廊が動き出し、行き場を失った夢の思い出はその大移動に採まれて粉々になってしまう。

さて、今日見た夢を文字に起こす。断片的に書き連ねる。「私は化け物を殺戮する存在だった」「私は人型の生き物に会った」「憎悪に駆られて何度も殺した」「繰り返している我突然私は崩れ去った」「粉々のプロック状に切り分けられた」「殺した生き物は私をせせら笑いながら蘇った」

覚えている限りを散文的に書き留める。心伝う奈落とそこにあつた恐怖をなんとか生かそうとする。支離滅裂であつたとしても、夢は一人の空想が作り出した物語なのだから。私は物語に消えて欲しくないと願う。しかし、やれやれ。もう書くことは無くなってしまった。しかもここに連続性を感じられているのは未だ夢の感覚が私に残っているからに過ぎなくて、明日になればこの記述は文字通り行間にあつたナニカを失っ

てしまう。そんな行為に意味はあるのだろうか？頭のハ割を微睡みに支配されながら、途方もない行方もない哲学に思いを馳せる。

夢は何らかのメタファー、あるいは単に現実のオブジェクト化。そういうものだと聞く。この夢は現実の何かしらに自分が意識を向けていることを示唆するものなのだろうか？

私が現実で、こちら側で重要に見ているもの。それは言わずともわかる。レースと、女優。別々の私を創り出し、退屈から救い出してくれるものたち。そして、トレーナーさんだ。…このωつの中に、私が殺した夢化け物の本質があるのだろうか。そこにあったのは嫌悪で、どれにも相応しくない気がする。擦れ始めた記憶をゆっくりと炙り出す。

恐怖があったはずなのだ。蘇り嘔う怪異に対して。諦めがあったはずなのだ。どこかで無駄だと思っているから、その願い通りに夢は運ばれる。夢というのは時折恐ろしい光景を見せてくるが、そこにある感情は常に「ああ、やっぱり」という絶望で。夢で起きることは、想像と想定の間を絶対超えないようにできているのだから。

※

言い換えれば、私が弱気だから夢の中の化け物に打ち勝てなかったということになる。…私弱気。そういえばそんなことは考えたことがなかったな。でも、心当たりはある。私が今恐れているもの。

私を拒絶する、トレーナーさん。夢の中の脅威を、そう結論づける。まだ頭は起きていない。もう少しだけ、夢を探ってみよう。

様々の手段を夢の中で講じた。その恐怖すべき対象を討ち滅ぼすため。戦法、道具、心構え。けれど全ては平等に無に帰して、悍ましい人型はそこに立っていた。これはどうしようもないということの表れというより、私が全て無駄だと思つてゐることの表れだろう。夢の中に本来不可能はない。可能性は自分自身にか閉じられない。

私を拒絶するなら。別れを告げられるなら。私は君を恐れずにはいられない。君だけが、私と君を別れさせることができるのだから。そんなことはないと言ふことは信じているが、心の裏にはそのことへの恐怖があった。これはつまり、私は君を信じ切れていないということだ。そのような可能性を頭に残しているという事実は、そんな弱い自分を曝け出す。

また、眠気が襲ってくる。夢日記はいよいよ文字の形すら怪しくなってくる。つけ続けるべきなのだろうか。私の弱さを明らかに出来るだろうか。明らかにしたいだろうか。

まだ少しだけ、夢の感覚が残っている。人型を見つけた時に覚えた使命感。殴り削り血が出なくなるまで傷をつけ続けたときの焦燥感。当たり前のようにズタズタの死体が再び人型となって立ち上がった時の諦観。

私にはやらなければならないことがある。そして、私にはそれをやらなければ大変なことになると不安がある。最後に、私はどうやってもその不安が現実化するのを抑えられない。

そう夢を抽象化して心の動きだけを取り出すと、答えはシンプルに近かった。

トレーナーさんが私を拒絶することへの恐怖。それは、去りゆく時間に対する畏れに等しい。タイムリミットがどこかであって、今の日々は永遠ではない。いつかどこかで別れが来てしまう。私自身が永遠という退屈なゲームを望んでいないのだから、永遠を信じられない夢が浮かび上がるのも当然のことだ。

或いはそれは真逆かもしれない。君を信じられなくなる私が、またどこかに潜んでいる。今の私を嘲笑うために巢食っている。あるいは嘆きながらのさばっているのだ。

でも。不安とは全て、期待の反転。紙一重の同位体。思考の揺れが、この感情をポジティブに活用してくれるかもしれない。だから。私は私自身を全て映す鏡として、この感情たちを捨て去らないようにしよう。

勇氣は恐怖からしか生まれないのだから。君のために、君に立ち向かおう。いずれ、別れを告げる時が来るとしても。

夢日記を記そうとすれば不思議と夢を見れなくなるもので、ページは一向に進まない。とはいえ夢を見ようとして睡眠の質を落とすのは馬鹿らしい。しかし一日だけでも収穫はあった。夢として現れた自分の奥底にある恐怖。それを忘れることなく過ごせている。

夢を見つめることで、己を剥き出しにする。寝ている間は無防備なものだが、それは思考も変わらない。私には珍しいくらい感情の起伏が出来る。だから気づけなかったはずの思考回路にも気づき得る。

私はトレーナーさんが怖い。君が私の前から去るのが怖い。もう君なしでは生きていけないのに、そんなことを思ってしまう。もし樂園へと辿り着いたなら。君と私の繋がりはそので終わってしまうのだろうか。そんな不安が最近止まらない。

引退という言葉がいつかは私にも迫り来る。その時の私はもう、トレーナーさんを必要としないのだろうか。それは成長だとしても、私はそれが嫌でたまらない。この感情を過去にしたいくない。全て持ったまま、歩んでいきたい。一つだつて捨てていいものはないのだ。恐怖さえ、私は背負うと決めたのだから。

それはきつと矛盾を孕む。私は己で己を傷つける。だとしても。別れを恐れて何がおかしいだろうか。立ち止まることを恐れて何か間違っているだろうか。私は普遍的な感情を持っているに過ぎない。その深度が病的と言われようと、その方向はありふれているはずだ。

自己矛盾。私が夢から得た見識が、それ。私は確かに君と歩んでいきたいと思つている。私はそれでも歩みの先にある別れを拒絶している。これが大元の矛盾だが、無数の板挟みも他にも散りばめられている。つくづく醜い存在だと自嘲する。

美しい個別のパーツを気にするあまり、その全体像はグロテスク極まりない。それが自己矛盾の先にある人物像で、私はそうなることを受け入れてすらいるかもしれない。ああ、でも。

そうなつてしまつては、君の横にいるのは相応しくないかもしれない。私はあくまで、君の隣に居続けたい。永遠に。永遠というものをつまらないと散々嘯いていた私は、ここでまず大きな矛盾を露出する。あまりにも滑稽。醜悪。見せ物にすらならない。

私はどうすればいいのだろう。虚空に石を投げ込んでも、一つの波紋も浮かばない。私はどうしても、もう無駄なのかもしれない。順当にどこかで立ち止まり、樂園に辿り着けず。摩天楼の頂上へは至れず。そして君と離れ離れになる。既に私の運命はそう決まつているような気すらした。追い縋れば。

例えば君に追い縋れば、君は私と一緒に居続けてくれるだろうか。走ることは出来なくなつて、一緒に居る意味を失つて。それでも、私を看取ってくれと頼んだら。全てを棒に振つて、君は私と共に暮らしてくれるだろうか。

そうであつてほしいと黒い囁きが聞こえる。君にはずつと、私を見ていてほしい。絆や信頼、そんな綺麗な言葉ではない。でも、かけがえのない存在になりたい。君なしでは私が生きていけないように、私も君の心臓を掴んでいたい。

そんなことは赦されないと、わかっているのに。私たちは樂園へと行くために契約した。私はその景色を見たいと願っている。それは今も揺るがない。揺るがせてはいけない。そのはずなのに、どうして正反対の欲求が呼び覚まされるのだろうか。

今すぐ自分の脚を粉碎して、君に車椅子を押してもらいたい。私の一部は、確実にそう願っている。

※

我々の走りが捕食者の歩みだとすれば。一人抜き去るたびにその喉笛を掻き切り、最後の勝利は血みどろと屍の上に成り立っているとすれば。それでも走り続けられるだろうか。

捕食者は罪を重ねる。殺さなければ生きていけないから。自らの生を他者の生よりも上だと断じたから。血を啜ることが我々の美德であり、草を食むだけに飽き足らない者と己を説いているのだ。

けれど誰か一人。最後に一人だけ生き残るとすれば、それは捕食者ではない。肉を食らう以上必ず一人では生きられない。老いれば捕らえられず、そもそも獲物がいなければ飢えるしかない。

だから私は、限りある生を生きるのだ。誰も捕まえられない捕食者に価値はなく、その後に生きる意味はない。生殺与奪を握るが故に、儂い炎を瞬く間に燃やす。

追いつけないほど速い獲物もある。例えば光を超えるそれには追いつけない。たとえ私の黒が光すら飲み込む闇だとしても、超光速はその重力すら脱するのだ。だからそれを追いかけるのは無駄なのだろうと、私は密かに思い込んでしまっている。

それでも、我々捕食者には掟がある。常に飢え続け、必ず追い続けよ。そうでなくてはどこかで満足し、あっという間に命を枯らしてしまう。私に止まることは許されていない。

※

そうして塵殺の罪を重ね、捕らえきれない逃亡者を目の当たりにし。絶望と失意の中で無為に帰すのが定め。そういうことになっている。だから。

だから、そんな大罪と敗残に包まれた私が樂園を目指すなどというのは。太陽に焦がれて身を焼かれたイカロスのような話であって、烏滸がましい思いがりなのかも知れない。

それでも私は樂園を目指している。何故か？当然。君がいてくれるからだ。私一人では届かず失墜するし

かない天上の園に、君がいるから手を掛けられる。私は哀れな捕食者の定めから、赦しを得て解き放たれる。救済を得て、楽園へと羽ばたける。

そう信じている。そうでなくてはいけない。何故なら君がそう信じている。ちっぽけな私を、連れて行けると言ってくれている。

君が掲げる大翼は、罪深い私さえも拾い上げられるに決まっている。他ならぬ君の願いが、叶わないはずがないのだ。

でも。もし。私が楽園に届かないとしたら。あり得ないと信じているけれど、もし。そうであるなら、それは私の罪悪だ。私が抱える罪を過少に信じていたからで、断じて君を過剰に信じていたからではない。

救えないほど罪深い捕食者が哀れなのであって、救えないモノを救おうとした君が愚かなのではない。だから私は、これ以上罪を重ねるわけにはいかない。つまり、誰かを抜き去り悲しみに暮れさせるべきではないのかも知れない。他者の競走生命を一撃の下に奪い去るべきではないのかも知れない。

そうだとしたら、私が走ることは間違っていたのだろうか？私の走りは捕食者の歩み。殺戮と死の頂点に座する。誰もが持つ夢を踏み躪る。あるかもわからない楽園への糧と嘯き、咎を重ねる。

まだ、時折言われる。女優として既に生活を得ているのにも関わらず、レースに身を投じることの強欲さ。二兎を追ひ、得ようとする傲慢さ。謂れないバッシングとは思わなし、全てに目を通して。

それでも私に正しさがあるとすれば、君の行動を肯定していることに尽きるだろう。だから私には、君がいなくてはいけない。君が連れて行ってくれなければどこにも行けない。独りでは煉獄にすら辿り着けない。

偶に、不思議に思うことがある。君はどうして私の傍にいてくれるのか。私は醜く、浅ましく、穢らわしい。何度も何度も君の存在を求めてしまう。普通ならとつくに飽き飽きしているはずだ。私だけが、飽きずに同じことを繰り返そうとしている。

それほどまでに君を何かで縛り付けて、動けなくしているのだとしたら。喜ばしいことなのだろうか。常識と理性は反論するが、私の獣性はそれを悦ぶ。ああ、君はまだいてくれる。君のことなら、骨まで喰らえそう。

そう、そうだ。私の本性は。優しく寄り添う君の腕を、骨ごと噛んで飲み干そうとしている。

あまつさえ、かけがえのない存在まで。ただの餌としか見ていない。喰らい、碎き、血を吹き出す様を見たいと願っている。

なんて、救いようがない。

これが愛だというのなら、獣欲を愛だと名乗るなら。私はもつと情けなく叫び、弱さを晒さなければならぬのに。いつまでも捕食者を気取り、欲求を満たす道具としてだけ君を使い尽くす。

だから、本質的に。根本的に。弱さも強さも持たない私は、人を愛する権利のない獣なのだ。私が抱える最大の罪。何人の夢を砕こうと届かない。欲に欲を重ねても見劣りする。

君を愛してしまったこと。それ以上に、獣の抱える罪はない。

※

「ねえ、前から気になっていたのだけど」

「どうした、タキオン」

カフェの指導について、タキオンと会話をしていた時。藪から棒にタキオンが問う。

「キミ、カフェについてどう思ってるんだい？いやあんまり私もトレーナーとウマ娘の関係について詳しいわけではないけど、君たちの距離感が正直よく分からなくてね…」

「ああ、それなら」

それなら答えは簡単だ。

「俺は彼女と約束したんだよ。彼女を、連れて行く」

だから、例えるなら。

「そうだな……俺はカフェが羽ばたくための翼の一部になれたらいいと思ってる」

付かず離れず、己の身体のように扱って欲しい。

「俺の意思はいらぬ。彼女が思うように動くために、俺はいる」

「……なるほどねえ」

飛び立つための翼。それは白だとすれば、彼女の黒とは普通なら決して相容れない。でも。俺がその継ぎ接ぎを担えば。彼女に翼を与えられる。

「身体の一部、か。それで満足なのかな」

「ああ、もちろん」

「ふうん……果たしてそのスタンスはどうなるのか。興味深いと言っては少し失礼かな」

「だから、そのためならなんでもするさ」

彼女が目指す楽園へは、まだまだ程遠いのだから。

「まあ私としても協力は惜しまないとも。カフェは優秀だ。そして君も、優秀だと思っている」

「俺はカフェのためにいる唯一のトレーナーだ。俺に優秀なところがあるとしたらそれだけで、あとはへっほこの半人前だよ」

「……なるほど。私も久しぶりにモルモット君の様子でも見に行くかな……。じゃあね」

そう言って、アグネスタキオンは部屋から出ていった。

「トレーナーと担当ウマ娘の関係、か」

元とはいえば、俺とマンハッタンカフェは全く別の世界の人間だ。少し前まで俺はトレーナーですらなかったし、彼女は芸能界で輝くスターだった。それが何の因果か、こうして契約を結んでいる。

途方もない存在である彼女に対して、俺ができることは何か。それを考えて、考え尽くして。きつといつか、彼女を楽園へと連れて行く。そして、辿り着ければ。

役目を失った羽根は焼け落ち、朽ち果てても構わない。
失樂園の漆黒は、接がれた翼で光を覆う。

Interlude:Actress.

「死ね！死ね！ねえ！はやく死んでよお！」

「なあカフエ……」

ある日のこと。

「なんですか？」

担当ウマ娘であるマンハッタンカフェと共に、彼女の出演したドラマを観ていたのだが。

「あは、あはは。やった、やっちゃったあ……」

画面に映るのは、血糊をべったりとつけた女優マンハッタンカフェの姿。

「……いや、ちょっと怖いな……」

「トレーナーさん、これはフィクションですよ」

正確には、隣に座る少女がなんの意図でこれを俺に観せているのかわからないのが怖い。ズタズタにされた男がもし自分だったらなどと思ったりはしないが……。

「これで、あたしはひとりぼっちだ。やっつと、やっつとひとり」

「結構お気に入りの役だったので、見てほしいと思ったのですが」

隣から少し気落ちしたような声が聞こえる。その変化は僅かだが、もうこれくらいなら声色の差を感じ取れるようになった。

「うん、でもこの子の気持ちはよくわかる。難しい役だろうに、さすがだな」

やっとひとりぼっち。そう言った画面内の少女からは、晴れやかな感情が読み取れる。でも。

「…この子は誰か、わかってくくれる人が欲しかったんだ。それがあの芝居だけで伝わった」

「…ええ、その通りです」

一見すれば、このドラマに出て来るマンハッタンカフェは愛と血に狂った少女の役だ。男の存在にうんざりして、殺してしまった。

「台本から逸脱しない程度に、細かい色を付けていく。演技における醍醐味ですから」

本当は誰も愛せなかった。愛してもらえなかった。そんな情景が、彼女の演技によって色付いていく。

「…：すごいな、カフェは」

「お褒めいただき光栄です。…：そうだ」

カフェが目の前へやって来る。黄金色の瞳が、吸い込むように見つめる。

「…：今度、歳上の男性に恋する役をやるんです。そのきっかけとなる事柄が一つあるのですが、経験がななくよくわからなくて」

「俺が力になれるのか？」

彼女の演技は研ぎ澄まされたもので、俺に何か手を加えられるだろうか。

「簡単です。頭を撫でて、えらいぞと」

「……なるほど」

少し気恥ずかしいが、それくらいお安い御用だ。

「偉いぞ。よく頑張った」

さすり、さすり。艶やかな黒髪を撫でると、彼女の耳がびくびく動く。緊張でぎこちなく、俺にはやはり演技は向いていないようだ。カフェはというと目を閉じている。演技に活かすため、感覚を集中させているのだろうか。

「……カフェ、どれくらい撫でたら」

「もう少し。もう少し、しばらく。お願いします」

本当はすこし、嘘をついた。そんな役の話など回ってきてはいない。

そのまま、幾億の時が経って欲しいような。

目を閉じていれば、永遠にすら続きそうな気がした。

Scene09: Countdown to the end.

夢を見た。マンハッタンカフェは春の天皇賞で勝利する。それは驚くべき偉業でありながら驚くことはか
けらもなく、私と君はその先へと準備を進める。それが運命。それが定められた道。そういう夢。

運命。春の朝がもたらす柔らかな陽射しで夢から目覚めた私の頭をよぎったワードは、季節に反して冷徹
で普遍的で。そして残酷。

今まで全てのレース結果。マンハッタンカフェというウマ娘が通るレースと、その結末。それは順位ど
ろか一挙一動のレース展開までずっと運命によって定められていた。そんな物語が頭に浮かぶのだ。

だから、私の中身が私でなくても。トレーナーさんと私が出会わなくても。運命に従い、マンハッタンカフェ
は春の天皇賞まで駒を進める。私たちの出会いは運命などではなく、我が名が背負うものだけに運命があっ
た。

そして。

満を辞して参戦した凱旋門賞でマンハッタンカフェは惨敗し、その後に脚の不調でターフを去る。

そこまで。これが、私に見えた夢の話。

あまりにも、惨い。許しがたい。こんな夢は正夢にしてたまるか。だって、私が私でなくても。トレーナーさんがトレーナーさんでなくても。

必要なのはマンハッタンカフェとそのトレーナー。彼女たちが必要な努力をすれば、全ての勝利と敗北は運命付けられる。あの日の出会いも、あの日の勝利も、あの日の涙も。必要性も絶対性も存在しない、なんて。そんな、そんなのは。

神による、ヒトへの冒瀆だ。

だから私は楽園へ向かおう。夢の先に見たものが、破滅の未来だとしても。あの灼熱の太陽が、私の身を焼くとしても。

神がいるなら、運命を定めた存在がいるなら。その存在はきつと楽園に居て、全てを見下ろす傲慢たる。そして私は、その神へと叛逆するために楽園へ向かうのだ。だから。

「ねえ、早く」

『君』が、連れて行って。

※

今日はファン感謝祭。他のウマ娘からは慣れないことかもしれないが、私からしたらファンサービスは慣れたものだ。

勝負服を着てファンと握手をし、すらすらとサインを書いてファンに手渡す。

気が気でなかった夢の痕は、心温まる交流でだんだんと薄れていく。まるで私の狩場から逃げるように。不安を追い立てる根柢のない夢など忘れるに限る。

そんな常識があるはずなのに、私は夢への恐怖を捨てきれない。夢への憎悪を捨てたくない。

「大丈夫か？」

「……トレーナー、さん」

ごった返す人混みをわざわざ割って入ってきたのは、私のトレーナーさんだった。ずっと私が、私の運命だと信じている人。私は君とでなければ樂園へと行けないと、そう確信している人。

「……すみません、ちょっとうちのマンハッタンカフェは体調が優れないみたいなので、休憩を貫きます」

そう言って、トレーナーさんは。

「……あっ」

「しっかり掴まってくれ」

ぎゅっ、と私の手を掴んで。引いて、引いて。私は惹かれて。二人だけの逃避行。そんなフレーズが、頭の中で揺蕩う。

※

「……ふう、ここなら人も来ないだろ」

「どうしたんですか、急に」

建物で出来た日陰、祭の熱気から離れた場所へ辿り着く。

平然なフリをして、私は聞くけれど。

「そんな思い詰めた表情をしてる君を、ほっとけるわけないだろ」

「……さすが、トレーナーさんですね」

私の表情変化など、誰も。私さえ気づいていなかったのに。私のことを全て知られているような気がして、ゾクゾクする。

※

「何かあったんだろ」

でも、ここは。

「夢を見たんですよ」

この夢の話は。

「天皇賞の春。その夢です。流石に緊張して、何度も負けるイメージを見てしまいました」

運命の車輪を、君には背負わせたくない。

「……そうか。カフェなら勝てるよ」

「私なら、ですか」

「マンハッタンカフェなら、勝てる。それを私は直感してしまった。」

「トレーナーさん……」

「どうしても不安なことはあると思う。天皇賞だけに限らない。今までだってあった。……でも、君は生き残ってるんだ。それに、俺がついてる」

「そうだ、そうだ。君がいる。君となら、私は楽園に行ける。そこに間違いがあるはずがない。私は私たちの正しさを証明するために走っている。断じて運命を回すために走っているのではない。」

「想いは昂り、激情は恋情と混ざり合う。」

「……って……!! いや……わかった。俺でよければ、いくらでも使ってくれ」

言葉もなく、思い切り。君の胸に飛び込む。ボタンが引きちぎれるほどに強くシャツを掴み、露出した胸板に顔を埋める。涙だけは出せない。芝居で培った小手先の技術で、感情の発露をギリギリで抑え込む。

「このまま。今日はファン感謝祭ですから。……一番のファンの、トレーナーさんに」

感謝を込めて。君を離したくない。与える愛と求める愛、アガベとエロスが混じり合った抱擁。

互いが死ぬまで、互いの肉を喰りたいとさえ願う。楽園への道筋はまだ続いていて、運命によって唐突に閉ざされることはないと思える。

楽園に辿り着く目的が、漸く明確になった。私が私の運命を超える。君の手を借りることで、届かない場所へと届く。

そういうことだ。
だから。

※

「——マンハッタンカフェ、春の天皇賞を制しました!!」

決まった結果。それを目の当たりにしても、まだ私たちは止まらない。

ここは天。なら、楽園は天の先にあるのだから。太陽が我が身を焼く前に、君と私が離れ離れになる前に。全てのウマ娘へ、運命を超えられることを実証してみせよう。

失楽園の漆黒は、自ずから闇の底へと向かう。

※

天皇賞を終え、夏合宿までの僅かの間にある何もない日のこと。トレーナー室でトレーナーさんと私が二人でいると、唐突にアグネスタキオンが扉を開けた。

「久しぶりだね、カフェとそのトレーナー君。……いや君にはカフェのトレーニングについてよく電話をさせてもらっていたか……」

その言葉を聞いて少し腹の中に煮えるものがあつたのは否定しない。まさか目の前の女性が横から君を掠め取ってしまったのか——なんてことを考えてしまい、すぐさまその強欲さを恥じる。

「……それで？ なんの御用でしょうか、タキオンさん」

努めて冷静に。仮面を被るのは私の日常であり、己を無に変換することはなんの苦痛もない。

「いやなに……たまには我がコブランへの賛辞を送らねばならないと思ってね……」

此度の春の天皇賞、勝利おめでとう。そして……その先」

「ご存知とは、流石ですね。……そう、私のゴールはここにはない。私たちは凱旋門を獲ります。難攻不落の頂点へ、必ず」

「君のトレーナーから聞いたんだけどね」

また、心が熱く熱く。熱で焼けた仮面をもう一度付け直す。努めて、私は冷静に。

「……そうですか」

「いつもありがとう、タキオン。カフェがここまで来れたのは、君の助力も大きい」

「私の全てを託すつもりだった存在だからね。開始前によく吟味する代わりに、一度開始したプランは必ず成功に導く。それが私のモットーなのさ」

……二人は私をよそに、談笑する。私と君のための空間に、違和感なく滑り込んだ異物。

「タキオンさん。どうもありがとうございました。では、そろそろ」

ここから。

「……む。私はまだ肝心な用を済ませていないけど」

「……は？」

するとアグネスタキオンは、一つの小瓶を取り出した。一步、引かざるを得ない。

「また怪しげな薬品ですか？ 私にもトレーナーさんにも、そんなものを飲ませるつもりはありませんよ」

警戒を発すると、彼女はクツクツと笑い声を上げる。

「……ああ、違う違う。これはボトルメッセージさ。海の方こうのマンハッタンカフェというウマ娘に届けてやってほしい」

「やれやれ。相変わらずあなたは持って回った言い回しをしますね。……要はあっちに行つてから開けろ、と」

タキオンはこちらに返答する代わりに、続けて一つの注意を述べる。

「……それともう一つ。開けたくなるまで、開けてはいけませんよ。」

また煙に巻くような発言。この人は本気で何かを伝えようとしているのだろうか？

「……それなら永遠に開けません、悪しからず」

「構わないさ。では、邪魔したね」

そう残して、アグネスタキオンは嵐のように去っていった。……全く。いつのまにか私の抱えた嫉妬を冷ましてしまったのだから、つくづく悔れない。

「トレーナーさん、この瓶は預けます。今は夏合宿のことを考えたいので」

「ああ、わかった。……そうだな、海外に向かうための最後の夏合宿。君を、ようやくどこかに連れて行ける」どこか。おそらく君のいうそれはあの門を潜ること。私を見るそれは、そこにある運命を超えること。

夢に見たあるはずのない未来。マンハッタンカフェは凱旋門賞で惨敗し、その競争生命を終える。

そのイメージは日に日に鮮明になる。まるでカウントダウンするかのよう。まるで、最後に現実になるかのように。

「……ええ、お任せを」

運命を越えなければならぬ。楽園はその先にあるのだから、私たちのやることは変わらない。

「血に飢えた猟犬のように、最期まであなたの命に従いましょう——」

たとえ私が愛という罪を孕むとしても。

たとえば私が楽園を終点とすることを望んでいなくても。

たとえ私が破滅の運命の輪に逆らうドン・キホーテだとしても。

君が私との楽園を望むのなら、私は征かねばならない。

失楽園の漆黒は、断頭台へとまた一步。

※

電車に乗ると、周囲の目線がこちらに集まってきた。これは動物として自然な反応で、それなりにリラック
クスした空間に入り込む余所者を誰しも警戒してしまう。やはり、人は獣の一種に過ぎないのだ。

それでも理性は目を逸らさせ、すぐに全ての人は自分の空間に戻るのだが……。

おや。どうにもこちらを見る視線は収まらない。職業柄目線には敏感になっているが、それでなくてもこ
れだけの視線は誰でも気にしてしまうのではないだろうか？

……確かに今の自分の格好は、少し目のやり場に困るかもしれないが、それでいい。

今日から二度目の夏合宿。君のためにおめかししたいというのが乙女心だ。

君と私の運命を超えるため。最後の追い込み。あるいは最後の夏。

※

「……おっ、あれはカフェだな」

バスを待ちながら、遠くに黒い長髪を湛えた彼女の姿を見る。今日からマンハッタンカフェとの夏合宿が始まる。去年の夏合宿を思い出すと、なかなか波乱があったような……。白いワンピース姿で現れ、私物の水着を着たカフェに日焼け止めを塗り……。

一見静かで大人しそうでいて、意外とカフェは有無を言わせない行動を取ることがある。とはいえその力強さが彼女をここまで連れてきた。今ならわかる。

「凱旋門賞、か……」

これから俺と彼女が挑むのは、難攻不落の凱旋門。誰一人として日本のウマ娘はその頂を獲れていない。前代未聞の偉業へ向けて。その呪いを、彼女なら。

……と、ゆっくり歩いてくるマンハッタンカフェの姿が徐々に近づいていた。制服ではなく、今年も少しお洒落をしてきているような――。

「あれ……カフェか……？」

近づくにつれて、その人影がよく知る少女であると信じられなくなる。あまりにも、普段のイメージと違う。今までもそんなことは何度かあったが、今回は特別違う。

一言で言えば、快活で、扇情的な服装だった。上はノースリーブのトップスで、胸のすぐ下で布は途切れている。下はミニスカートだけで、透き通るような色白の肢体が惜しげもなく曝け出されている。

「おはようございます、トレーナーさん」

彼女は確かにそう言ったのだけど。

「……ああ！ おはよう、カフェ」

目が泳ぎ、答えに躊躇ってしまう。……やはり彼女は人気女優なのだと、久しぶりに思い出す。このような服でさえ着こなしてしまうのだから。

「……ふふ。見惚れてしまいましたか？ ここに来るまでもそうでしたので、隠さなくてもいいですよ」

そう、妖しく笑う少女は。少女と言いつくには余りにも艶やかで。

「……いや、その……目のやり場に困るかもだが。似合ってるよ、すごく素敵だと思う」

「それなら良かったです」

けれど薄く浮かべた笑みは、今度こそ少女のそれで。危ういバランスの上に成り立つものの美しさというものを、初めて目の当たりにした気がした。

※

Scene 09: Countdown to the end.

そうして、夏は過ぎていき。海外のレースは全てが未知の領域。相對する者も、走るべきターフも。だけど、見えない目標に向かって走るのには慣れている。私はまだ、君に連れて行かれる最中なのだから。

今日の夜はトレーナーさんと祭りに行くことになっている。ミニスカートと薄手のトップスに身を包む。学園指定の水着よりよっぽど露出が多いかもしれない。

だけど、君の目は捕らえられたから。これはきつと間違いない。

トレーナー寮に向かうと、示し合わせたようにトレーナーさんが出てきた。こんなタイミングの一致すら運命を感じさせて、心がときめいてしまう。

「……おお、カフエ。……夏とはいえ、それ寒くないか？」

「……そうですね、少し寒いかも」

そう言っ、私は。

ぎゅっ、と。

「……俺の腕はそんなに暖かいかな」

「ええ、もちろん」

だって君に抱きついていれば、それだけで私の身体は灼かれるように熱くなるのだから。

祭囃子が鳴り響く屋台通り。ずっと、身体で君の腕を包んでいる。

「そこのお熱いカップルさん、こっちはどうだい！」

「ああいや、俺たちは……」

そんなふうには否定したって、人の見る目は変わらないのに。顔を赤くして必死に説明する君を見て、さらに身体を擦り付けてやる。

「……人が多いと目立つな」

「目立つのには慣れていますが」

「俺は慣れてないよ……」

そういうことなら仕方ない。人気の無い所で二人きりというのもいいものではあるし。

※

祭りの中心から少し離れた高台に行く。……人は少ないけれど、其処にいたのはカップルばかりだった。おやおや。

「ここなら目立ちませんね、トレーナーさん？」

「そ、そうだな……」

周りに做うように、手すりに二人並んで腰掛ける。啄むような口付けさえ、今の私達には叶わないけれど。

「そういえば、今年は女優の仕事はどうなんだ？」

ふと、トレーナーさんが口を開く。今年か。確かに去年は心配をかけてしまった。周りにも、君にも。

「マネージャーが色々配慮したスケジュールを組んでくれたので。それなりに両立できていますよ」

「マネージャー、か。そういえばカフェのマネージャーの話、ちゃんと聞いたことないかもな」

マネージャーの話。彼女は誠心誠意、私のことを考えてくれているのだと思う。時に厄介な案件を持ってくるけど……例えば。

「トゥインクル・シリーズなんかは、マネージャーの指図でしたね。女優としてのキャリアのために……と。女優のための副業のはずだったこちらにかまけている今は、彼女の本心からすれば怒られてしまうかもしれないね」

全く難儀なのは私の元来の性格で、それに怒る気力など残っているだろうか。

「なるほど……ならマネージャーさんには感謝しないとな」

はて。君は意外なことを口にする。

「だって、それならマネージャーさんのおかげじゃないか」

瞬間。

ばあん、と打ち上がり。ひゅるるる、と上り。

「俺が君に会えたのは。一緒にレースに向かえるのは」

どかん、と花火が咲いて。君と私を鮮やかに染めた。

光華爛漫。君と私を照らす夢。

「そうですね、彼女のおかげかもしれません」

「いつか、会わなきゃな。君を支える者同士として話してみたいよ」

「では、凱旋門での勝利を手土産にしましようか」

「ああ」

「……綺麗ですね」

私の眼は、君の瞳に映る華を見遣り。

「……そうだな、すごく綺麗だよ」

君の眼は、私の瞳に落ちる影を映して。

二人の影は。生み出す闇は。一つに重なる。

失業園の漆黒は、夜の闇に咲き誇る。

Interlude: girls.

「ああ、こんにちは」

テレビ局の通路、見知った顔を見て挨拶する。

「…どうも。お互い苦労するね」

彼女の名前はゴールドシチー。百年に一人の美少女と言われ、モデル業とレースの二足の草鞋を履いている。

そして二足の草鞋を履いているのは、私マンハッタンカフェも同じこと。

「…苦労すると言っても、私たちにも差はあるでしょうね。この状況を呼び込んだ理由、この状況での行い
そう、告げる。譲れないものは互いにあるが、確かに分かり合える話題でもある。」

「…まあね。あと一つ言っとくけど、ユキノに変なこと吹き込まないでよ。芸能界のくだらないところとか
「ユキノさんと仲が良かったんですね。その件についてはこちらからもお願いいたします」

「…たく」

噛み合わせようとすれば、お互い色々な仮面をつけるのは容易だろう。私たちはレースの他にそういう職業に就いているのだから。だけど。

「どう？アンタは楽しい？レース」

「ええ、もちろん」

私たちはターフを駆けるウマ娘。言葉をぶつけることに、遠慮は要らない。

Scene 10: You are my wing.

Scene 10: You are my wing.

一つ、やはり夢を見て。わかりきった内容なのに、何度目覚めても忘れられない。マンハッタンカフェという存在は、凱旋門賞で敗北する。架空の記憶に過ぎないそれは、バリにやって来てから更に現実に近づいた気がする。

一週間の滞在はあつという間。こちらの馬場にもある程度慣れて、体調も悪くない。何もかもが順調なはずだ。だから、私の心臓に起こる迷いはきつと誤りで。

凱旋門賞を明日に控え、今日は一人での休息の日。だけど、君に会いたい。君と会えば心臓の迷いは取り払える気がする。君と会えばまだ進める気がする。君となら、楽園へ。運命の先へ。

そう、思うだけ。そうやって断頭台へ連れられるのをただ待ただけだった私を、誰かがどこか別のところへ連れて行ってくれるとしたら。その誰かは、君しかいないのだろう。

「……もしもし、トレーナーさん。寂しくなりましたか？ ……冗談ですよ、おはようございます」

トレーナーさんからのモーニングコール。トレーナーさんから言い出してくれたことだけど、私が密かに望んでいたことだ。君は私のことを日に日に理解してくれている気がする。思い遣ってくれている気がする。

「明日に向けて、今日はお休みの日ですから。……え？ ……ええ、もちろん」

リラックスできているか。そんな質問に、当然だと返す。嘘を吐く。君の声を聞くまで、不安ではち切れそうだった。君の声を聞いてから、疼きが止まらない。

「えっと。……おっと、いえ。トレーナーさんから、どうぞ。……はい、はい。エッフェル塔に〇時……？ それって」

それって。逢引きという言葉が口を突いて出そうになる。だって、今日はトレーニングではない。リフレッシュのためのお出かけの日でもない。本当の、休息の日。かけがえない休息を、誰かと過ごすなら。

「いえ、なんでもありません。……もちろん行きます。部屋に居たって何にもならないというのは同感ですから。……では」

電話を切る。素っ気なすぎただろうか。君からのデートの誘いだというのに。わからない。私が愛しているほどに君が愛してくれる保証はどこにもない。何度も演じた愛の告白は、その時になって私の口から飛び出していけるだろうか。わからない。

わからないけど、わからないからこそ。私は君を追い求めよう。

寝間着を脱いで、装いを吟味して。まるで少女のように、私の心臓は高鳴る。否、今はきつと本当に少女なのだ。運命に縛られた哀れな道化ではなくなるのだ。

たとえ、明日私の競争生命が終わるとしても。明日までは、私は生きていられるのだ。

さあ、行こう。

Scene 10: You are my wing.

※

冷たい朝。……急に呼び出して、よくなかっただろう。待ち合わせの時間が近づいて、俺の不安はどんどん大きくなる。

「……まったく」

すっかりしなければ。これくらいの不安、マンハッタンカフェは何度も何度も経験してきただろう。撮影を目の前にして、レースを目の前にして。俺には見えないものを見ていただろう。

ならば、それを和らげること。それだけが、俺に可能なことなのだ。

今日の待ち合わせは、トレーナーとしては越権行為に近い。アンタツチャブルな担当ウマ娘のオフの日を、レースの前振りとして使ってしまったている。それだけなら到底許されない。

けれど、一人の人間として。彼女に夢を見る存在として。力になろうとするならば、許されるのではないだろうか。

無論、許されなくても構わない。それが彼女のためになるのなら、俺は喜んで劫火に身を投げよう。

そして、時間は進み。

遠くに、彼女の姿を見た。

「トレーナーさん、お待たせしました」

薄い桃色のセーターに、黒いロングスカートを。落ち着いた格好のマンハッタンカフェが、此方に向かって駆けてきた。

「おお、おはようカフェ」

しゃなり。彼女は薄く笑う。レース場の彼女は煮えたぎるほどの黒を背負っているのに、今の彼女は柔らかな雰囲気を漂わせている。演技ではなく、本当に安らいでいるのだと思う。

※

「エッフェル塔で、と言われて。それだけではどこで待ち合わせるのかわかりませんでした」

「ああ、それはごめん！」

「もう、それくらいで怒りませんよ」

パリの街を周るコースは考えたのだが、実際に見てみると全く勝手が違う。

今自分たちの横に聳え立つエッフェル塔は、とてもとても高く大きくて。これを人が作ったなんて信じられない。

「……こうして見ると、さながらバベルの塔ですね」

「……バベルの塔？」

「そうです」

Scene 10: You are my wing.

バベルの塔。聖書に出てくる大きな塔……だったか。それ以上の知識がなくピンと来ていない俺を察したのか、カフエは説明を始める。

「かつて人は皆、一つの言語で繋がっていました。団結し、協力する。それができていました。そうして大勢の人達が一緒になって造り上げた塔の名前が……バベルの塔」

あくまで宗教上の伝説ですがね、と彼女は付け足す。

「この塔の目的は、神のいる場所まで到達することだったのですが……それに神は怒りました。神の怒りで全ての人は言語を分たれ、塔は未完成のまま。……傲慢なお話ですよね」

傲慢。おそらくこれは、人が神へと到達しようとする傲慢を罰する説話なのだろうが。

「なるほど、確かに傲慢な神様だな」

「ご名答。我々は信徒ではないですからね」

神の傲慢。全てを掌に乗せようとする。運命に逆らうことを許さないこと。その傲慢に対する怒りを、確かにマンハッタンカフエから感じ取った。

「……大丈夫。俺も君と同じ気持ちだ」

「……ありがとうございます」

カフエが何処へと行くのか。何を射抜くのか。それがどのような大それたことであっても、俺の役目は彼女をその先へ連れて行くことなのだから。

「……さあ、じゃあ行こうか。意外と時間はないんだ」

そう言うのと、彼女は無言で此方へ手を伸ばす。……甘え上手になったものだ。

「……よし、行こう」

手を取って、ゆっくりと。パリの10月は寒い。温まりながら行くことは間違いない。

※

「ここが、ノートルダム大聖堂だ」

「……写真で見たことはありませんが、やはり肉眼では違いますね」

小一時間歩いて、最初の目的地であるノートルダム大聖堂に着く。煌びやかなバロック建築に、カフェは目をキラキラさせている。

「曰く、この建物は様々の苦難に遭ったそうです。芸術品である以前に、政治的、宗教的立ち位置も持っていた。それ故にここまで偉大な建造物となったはずですが、それ故に何度も破壊と略奪に見舞われた」

「……よく知ってるな、カフェは」

「パリに来るのが楽しみです、沢山調べていました。……冗談ですよ」

くすりと笑い、彼女は話を続ける。ステンドグラスの下を歩く少女は、その舞台と一体化したようだった。

「……それでも、立ち直る。何度壊れても、焼かれても。もしこの大聖堂が現代において再び大規模な破壊に遭ったとしても、きっと立ち直るでしょう……真の強さとは、そういうことかもしれませんね」

Scene 10: You are my wing.

「……君は、そうじゃないのかな」

なんとなく、羨むような口調。けれど俺は、目の前の彼女にだって立ち直る強さがあると思う。あの超光速の名を持つウマ娘が、立ち直らんとしているように。

「……私は立ち直れたと思いますか？ 弥生賞の時から、ずっと闇の底に沈んでいると。そうは思いませんか？」

失楽。彼女の強さが飢えと渴望にあるのだとしたら、ずっと足りないものを求めて苦しんでいるというのは間違いではないかもしれない。

けれど。

「君は、間違いなく成長してるよ。俺が保証する。……俺じゃ足りないかもしれないけど」

俺の全身を懸けて、君の存在を保証する。闇に沈むというのなら、そこから這い上がるための踏み台となるろう。

「……いいえ。トレーナーさんが言うなら間違いないでしょう。私自身よりも、私を一番見ている人なのですから」

厳かな雰囲気の下、二人の繋がりを確かめ合う。相手が沈むなら、代わりに己が沈む。そういう繋がりが。

まだ、二人の時間は終わらない。永遠ではないとしても、今は時間を忘れよう。

失楽園の漆黒は、闇と光を溶かし合わせる。

「……こうして見ると、さながらバベルの塔ですね」

「……バベルの塔？」

「そうです」

バベルの塔。聖書に出てくる大きな塔……だったか。それ以上の知識がなくピンと来ていない俺を察したのか、カフエは説明を始める。

「かつて人は皆、一つの言語で繋がっていました。団結し、協力する。それができていました。そうして大勢の人達が一緒になって造り上げた塔の名前が……バベルの塔」

あくまで宗教上の伝説ですがね、と彼女は付け足す。

「この塔の目的は、神のいる場所まで到達することだったのですが……それに神は怒りました。神の怒りで全ての人は言語を分たれ、塔は未完成のまま。……傲慢なお話ですよね」

傲慢。おそらくこれは、人が神へと到達しようとする傲慢を罰する説話なのだろうが。

「なるほど、確かに傲慢な神様だな」

「ご名答。我々は信徒ではないですからね」

神の傲慢。全てを掌に乗せようとする。運命に逆らうことを許さないこと。その傲慢に対する怒りを、確かにマンハッタンカフェから感じ取った。

「……大丈夫。俺も君と同じ気持ちだ」

Scene 10: You are my wing.

「……ありがとうございます」

カフェが何処へと行くのか。何を射抜くのか。それがどのような大それたことであっても、俺の役目は彼女をその先へ連れて行くことなのだから。

「……さあ、じゃあ行こうか。意外と時間はないんだ」

そう言うと、彼女は無言で此方へ手を伸ばす。……甘え上手になったものだ。

「……よし、行こう」

手を取って、ゆっくりと。パリの10月は寒い。温まりながら行くことは間違いじゃない。

※

「ここが、ノートルダム大聖堂だ」

「……写真で見たことはありませんが、やはり肉眼では違いますね」

小一時間歩いて、最初の目的地であるノートルダム大聖堂に着く。煌びやかなバロック建築に、カフェは目をキラキラさせている。

「曰く、この建物は様々の苦難に遭ったそうです。芸術品である以前に、政治的、宗教的立ち位置も持っていた。それ故にここまで偉大な建造物となったはずですが、それ故に何度も破壊と略奪に見舞われた」

「……よく知ってるな、カフェは」

「パリに来るのが楽しみで、沢山調べていました。……冗談ですよ」

くすりと笑い、彼女は話を続ける。ステンドグラスの下を歩く少女は、その舞台と一体化したようだった。「それでも、立ち直る。何度壊れても、焼かれても。もしこの大聖堂が現代において再び大規模な破壊に遭ったとしても、きつと立ち直るのでしょうか……真の強さとは、そういうことかもしれないね」

「……君は、そうじゃないのかな」

なんとなく、羨むような口調。けれど俺は、目の前の彼女にだって立ち直る強さがあると思う。あの超光速の名を持つウマ娘が、立ち直らんとしているように。

「私は立ち直れたと思いますか？ 弥生賞の時から、ずっと闇の底に沈んでいる。そうは思いませんか？」失楽。彼女の強さが飢えと渴望にあるのだとしたら、ずっと足りないものを求めて苦しんでいるというのは間違いではないかもしれない。

けれど。

「君は、間違いなく成長してるよ。俺が保証する。……俺じゃ足りないかもしれないけど」

俺の全身を懸けて、君の存在を保証する。闇に沈むというのなら、そこから這い上がるための踏み台となるろう。

「いいえ。トレーナーさんが言うなら間違いなのでしょう。私自身よりも、私を一番見ている人なのですから」

厳かな雰囲気の下、二人の繋がりを確かめ合う。相手が沈むなら、代わりに己が沈む。そういう繋がり。まだ、二人の時間は終わらない。永遠ではないとしても、今は時間を忘れよう。失楽園の漆黒は、闇と光を溶かし合わせる。

※

「どうだ、美味しいか？」

レストランでトレーナーさんと二人、小さなテーブルを囲んで昼食を取る。

「トレーナーさんと同じ料理を頼んだんですから、トレーナーさんが美味しいなら私も美味しいですよ」

そう、言ってる。私はトレーナーさんが頼んだコースと同じコースを頼んだ。メインは寒い時期にぴったりなポトフ。たとえメニューの一つでも、お揃いというのは心が躍るから。……でも。

「……カフェ、周りが気になるか？」

「……ああ、すみません。やはり外国の方というのは見目麗しいものですから」

本当は。きつとあそこの二人も、遠くの二人も。所作から恋人だとわかること。私たちはそうではないこと。それが少し、狂おしい。

「カフェだって綺麗だよ。自信を持ってくれ。なにせ日本代表で凱旋門賞に挑戦するんだからな」

冗談めかして言われるその言葉はきつと親愛で、情愛ではないのだろう。嬉しい言葉だけれど、苦しい。切ない。でも、それが正しい。間違っているのは私で、私に君を愛する資格はないのに。

けれど、求めてしまう。だから、私は明日勝たねばならない。君に漸く報いることができるとすれば、それは私が敗北の運命を超えたときに相違ない。

「……と、ごめん。ちょっと席を外すよ」

唐突に、君が席を立つ。……なるほど。わざわざ言葉を伏せてくれてはいるが、手洗いに駆けてゆく君の姿が見えた。

……と、そこで。ほんの少し、思いつく。いじらしく、おぞましく。ホンを読む上では登場人物の恋心ゆえの行動にも論理を求めてしまうが、実際にはそこに理屈など存在しない。そう自らの行動から思い知らされる。

※

「おまたせ、カフェ。わざわざ食わずに待っててくれたのか」

「ええ、一緒に食べたいですから」

「いつも気を遣ってしまわせてるな」

そんなことはない。今さっきの行動だって、全て己のためだとも。

Scene 10: You are my wing.

「……さ、早く」

「そんなに見なくても」

「トレーナーさんが食べたのを確認したら、私も食べ始めますから」

そう言うと、トレーナーさんは食べかけのポトフに銀食器を挿し入れる。……ああ、たまらない。気づかないだろう。気づくわけがない。

＝まさか、皿を入れ替えられているなんて＝

「さ、カフェも食べなよ」

「……！ ……ええ、ええ」

……君の指示で、君を求めるなんて。向かい合って、互いを喰らうことの幻視。ああ、まるで。たとえ罪に手を濡らすとしても、私はそこに幸せを見てしまうのだ。

かち、かち。銀食器の擦れる音は、布擦れの如く。

歩く、歩く。ゆっくりと、トレーナーさんと手を繋いで。それだけで私は幸せだけど、どうも先ほどからのトレーナーさんはしきりに腕時計を見ていて落ち着かない様子だ。

「やっぱり……いや、これくらいなら想定内だ」

今日の「お出かけ」のコースはトレーナーさん主導だ。次はどこへ連れて行ってくれるのだろうか。そう、私が心を弾ませていると。

「よし、カフェ。こちら辺で徒歩は終わりにしよう。その、間に合わない」
む。

「私と歩くのは嫌になりましたか……?」

そうではないとしても、そう言いたくなるのが乙女心というものだ。

「いやいや! そう、ここからは自転車を借りようかなと」

むう。君との触れ合いがなくなってしまうのは忍びない。……しかし。

「約束する。絶対君を最後まで連れて行きたいんだ。そのために」

彼の言う最後とは、この道の終わりか、はたまた。

「わかりました。トレーナーさんを信じましょう」

そう、決めた。ずっと前から決まっている。

※

パリにはヴェリブという市が提供する貸自転車システムがある。景観を損なわない程度に自転車置場とレンタル待ちの自転車がそこかしこに並んでおり、最初の30分は無料。つまり街中で出発地点から目的地まで30分以内に移動してしまえば、レンタルの料金はかからないという寸法だ。

けれど、一つ問題があつて。

「じゃあ、私は並走しますから」

「いいの、トレーニングでもないのに。……ほら、これだけ空きはある。ちゃんと二人分あるんだ」

問題というのは。

「……その、自転車は」

「自転車は？」

「……乗ったことが、なくて……」

私は自転車で乗った経験がない。子供の頃から部屋の中で過ごすことが多かったし、走れば移動には困らなかつたから。現に今だって、自らの脚を使えばなんの問題もないだろう。

だけど。

「そうか、そう言われるとその可能性はあつたな……。しかし、カフェを一人走らせるといふのは……」

「トレーナーさんには、私を連れて行きたい場所があるんですよ」

「ああ、そうだ……。確かにそのためには、急がないと」

「……それなら、尚更。トレーナーさんと同じ視線を持ちたいです」

だから。

「私も乗りましょう。……体幹ならそれなりに鍛えていますから。初めて、ですが」

他愛もないことだけど、君の手で、君の手で、初めてを経験するのだ。それはどんなにか素晴らしい。そう、思う。

「……っと、止まると転けてしまいますね」

サドルに跨り、ペダルに足をかけ。まるで生まれたての子鹿のように、よろよろと動き回る。

「……さて、行きましょうトレーナーさん」

「……よし、カフェが勇気を出してるんだしな」

「ふふっ、大袈裟ですよ」

並んで、走り出す。戸惑う私を、君がリードする。まだ手を引かれているような幻覚。何度も丁寧にこちらを確認する君は、きつと優しいのだと思う。そうして視線が合うと、私は少し笑ってみせる。

あくまで私は君を捕える者だから、強者の余裕を誦じるのだ。たとえ、心は既に君に囚われているとしても。

Scene 10: You are my wing.

※

「……………」

気は抜けない。確かに走るよりは楽だけれど、操縦はなかなか難しい。ハンドルに汗が滲んでいる気がする。

「うまいぞ、カフェ」

「ありがとうございます……………っ！」

不意に。

がたん。気の緩みからペダルを踏み外し、バランスを崩す。危ない。維持を諦め、そのまま倒れ込もうとしたところで。

「カフェ！」

横から飛び込んできた人影が、私を包んで引っ張る。倒れゆく方向は反転し、暖かいクッションが私を包んだ。

がしゅん、と二台の自転車が倒れる。それと同時に、私の心臓が跳ねる音がした。

トレーナーさんが、私を抱きしめている。私が倒れるのを庇って、そのまま地面に己を引き摺り込んだのだ。私の身体に一分の痛みも走らないように。その気遣いを理解しただけで、私の心臓は切り裂かれたように血を流す。

私は、君のことを愛してしまっているから。

日はまだ陰らない。まだ、私はこれを逢い引きと幻視できる。